

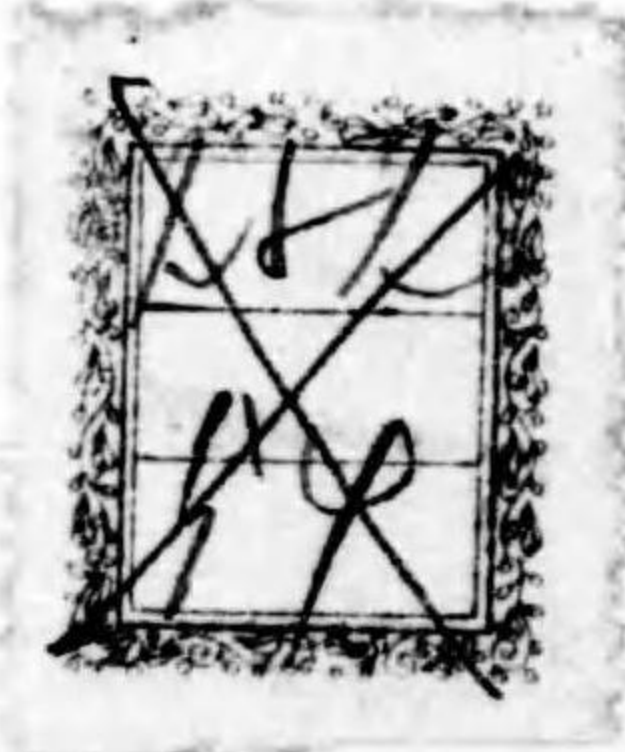
鎧坂虎嘯著

お師匠さま



1920

大 明 堂 書 店



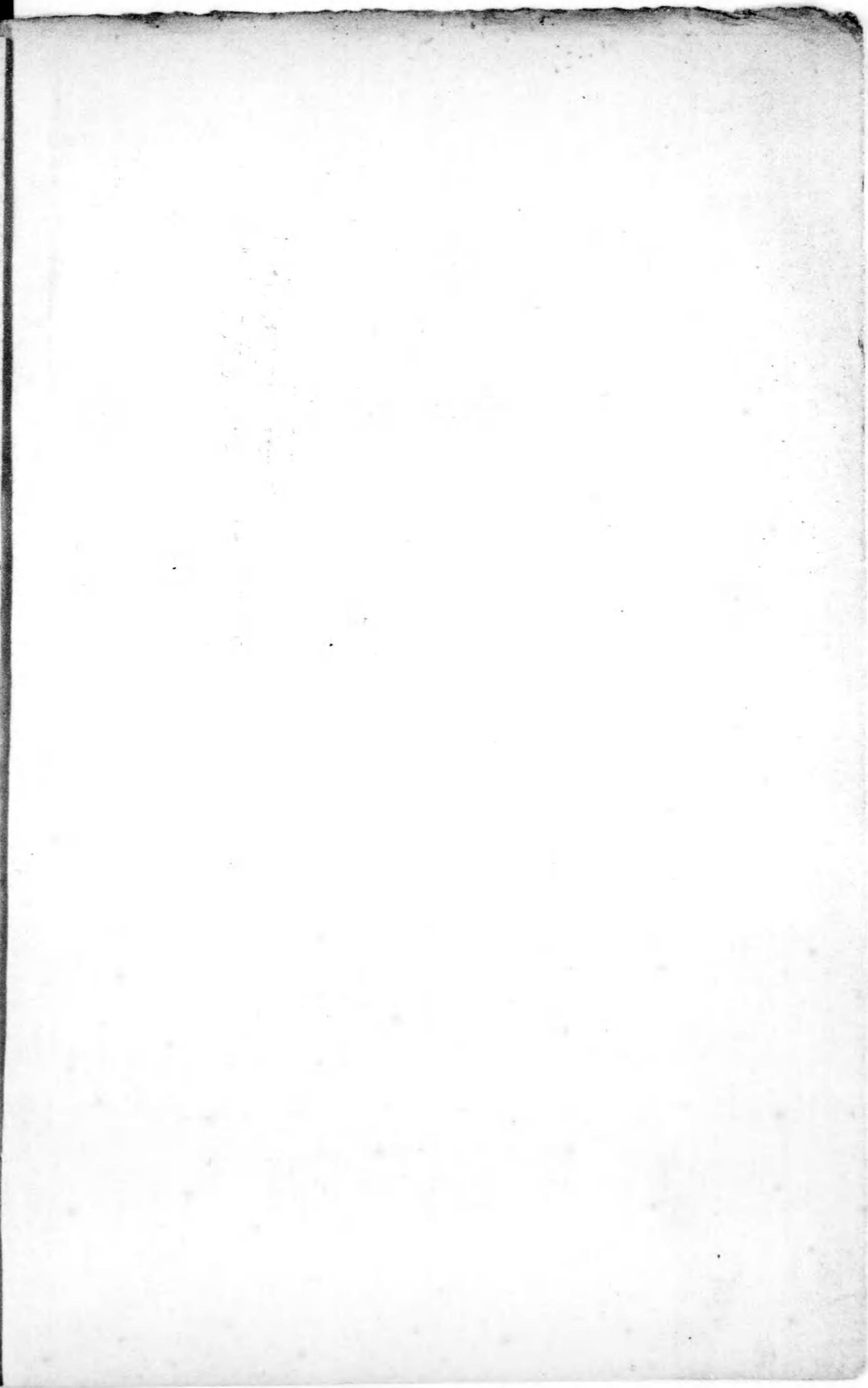
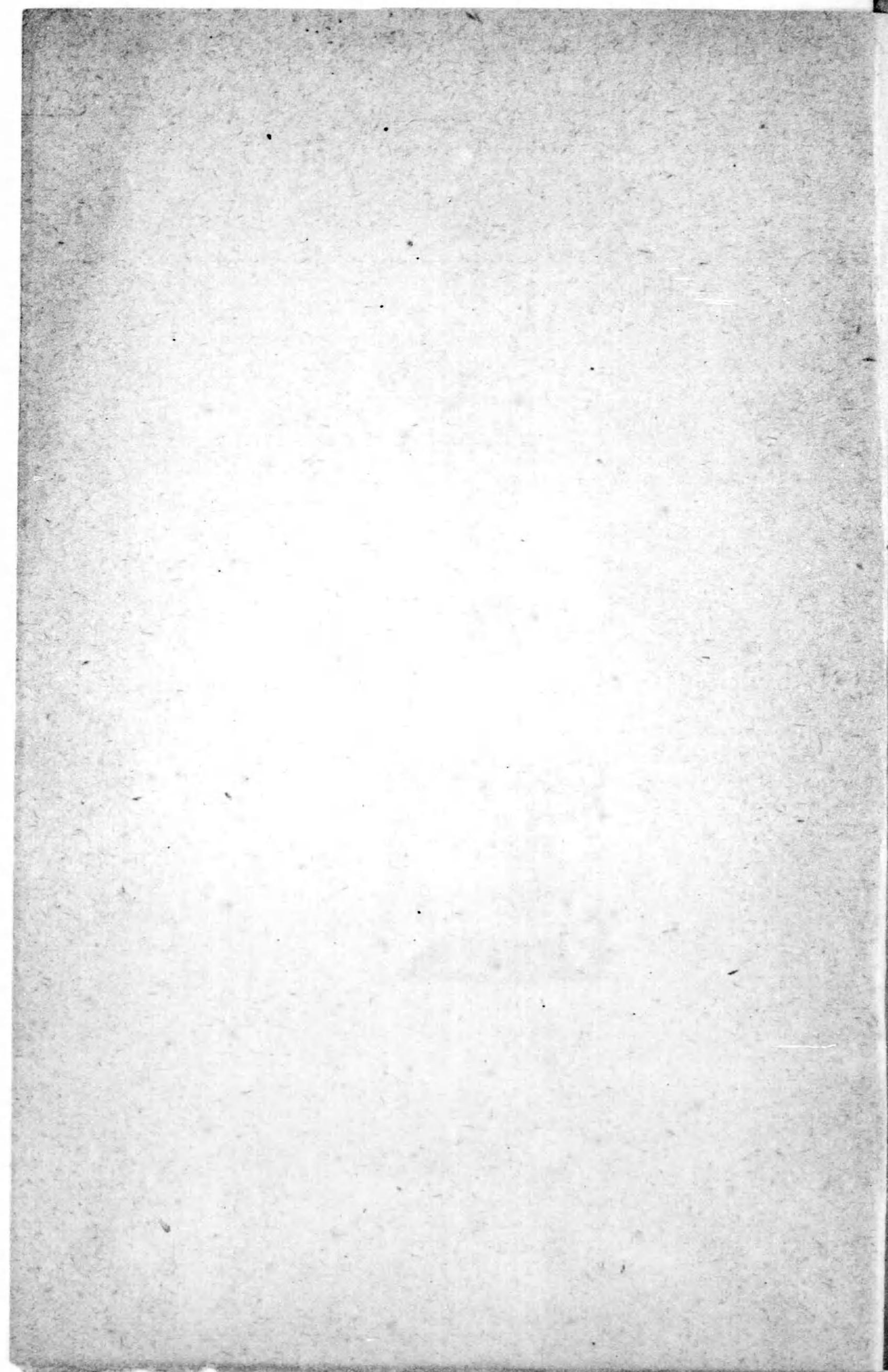
特



始









特102  
602



鎧坂虎嘯著

お師匠さま

大正  
9. 5. 3  
1 内交

大 明 堂 書 店



### 序

本書の著者鐘坂君は學生として珍らしき人である。嘗つて發動機製作家として砲兵工廠に職を奉ずること數年、自から筋肉勞働にしたしみ、本書の印刷の如きも、殆んど、同君自からの手になつたと言ふことである。

自分の著者を知ること茲に兩三年、其間に解し得たるところによれば、著作の態度には毎も着實に歩一步と前途を切り開いて行かうとする堅實な風が認められる。著者をして過去に發動機製作家として相應の伎倆を有せしめ、自からの作物を自から印刷するに至らしめた努力も悉くそこから生ずる。

自分は著作の此の堅實なる態度と其不撓なる努力とに多大の望みを囑し、此の作物に芽生しつゝ、ある眞摯なる態度の、やがて意義あるものと、益々、發展し來る將來のあることを信じて疑はないものである。

田 部 重 治



### 自序

お前は一生を藝術に捧げるのか、どうせ僕の危介者だ。

さう言はれた兄さんの言葉、慈悲、あらゆる愛情の集合、さては遠い旅へ向けて横濱を解纜された其面影、私はそれを思ふ度に唯々暗涙の外はありません。

然し幸ひにも、私の半生に積まれた努力、私にまつては前途を照らす光明でもあり、藝術に於ける出発点でもあつたこの集を公にして、亡き兄さんの墓前に捧げ、心から將來の努力を誓ふことの出来る喜びを禁じ得ないのです。

大正九年四月

思ひ出多き小石川の宅にて

鎧坂真一識



目次

お師匠さま……………一

ある慈善家……………二九

床屋の弟子……………七二



お師匠さま

(大正八年八月作)



俊子はやもめ暮しであつた。

かの女はもうそろ／＼四十五に手がとどきさうで、夫をうしなつたのは十年も、もつと以前の話だとか言つてゐた。生れは相當な資産家で、けれども今はただ腕一つに、針仕事と、六七人の女たちに教へる月謝だけが生活費になつてゐた。ところで、かの女は決して窮迫してゐる模様を外に現はさなかつた。かの女は常に厚化粧をしてゐた。

俊子はまた恁麼ことをよく言つた。

『これでも、まだ三十位に見えるんですわ、そして、この通り肥えてゐるんで



すもの。』

實際の話が、ちよつと見たところは如何にも上品で、顔のわりに體は非常にまる／＼してゐた。着物も始終大柄の品を好んでゐた。ただその皮膚の色があくどひ濁りやうで、顔などもかなり皺を持つてゐたし、一番かくしきれないのは、その腫が何處となくたるんで見えることであつた。

かの女は愛嬌たつぷりで、ごつちかと言へば勢力の盛んな、俗に負けず嫌ひと云ふ方の女であつた。かの女はいたつて話上手で、表面的には、若い者にも中老にもよろこばれた。

『私と交際すれば、どんな人でも快活になる。』と言ふのが俊子の癖であつたけれど、才氣のある男には嫌がられてゐた。何故と云ふに、かの女はだんだん話に熱しだすと、やや興奮して、顔色が蒼く變つたり、揉手をしながら、時には着物の端をいちつたりした。そして恚ふ言つた。

『私の若い時分は！』

しかし、それは俊子のやうな境遇にある人の誰れでも言ひさうなことで、あまり氣にとめる程ではなかつた。でもかの女の力のない高笑ひを聞く時には、ある憤りと淋しさを感じずにはゐられなかつた。

『昔話になんの價値があるんだ。靜に聞いて見ろ、お前の話はすべてが妥協でかたまつてゐるぢやアないか。』と才氣に富んだ人は言ふであらう。

かの女はどんな世間話から出發しても、後にはきつと自分の思ひ出に落ちて行つた。云ふまでもなく、かの女は蒼く顔色を變へて、ごもりながら、神経質なふるひ方をしてゐた。

『女學校時代のことでした。それも夏の夜で、友だちと二三人がある橋に涼んでゐますと、書生さんが態々つき當つて見たり、もし／＼と嫌な聲で呼止めたりしました。恚麼ことは若い時に誰れでも經驗する話で、もう私のやうな婆さ



んになると、から駄目ですがね………白状しますと、その頃はまったく有頂天になつて喜んだものです。自分の姿が異性の眼を惹いたと氣づくほど愉快なことはありませんからね。でも娘の頃は耻づかしさがあつて、もつとも私はお轉婆の方でしたから、馬鹿！と直ぐに怒鳴つてやりました。そして、盗むやうに學生を見ることがありました………人の話によると、私の母は非常に美人で、父は首つだけだつたと言ひます。』

俊子はその大きな眼を態々縮めてゐた。かの女は空虚な聲で常に笑つて見せた。

晝間はお針子と一緒になつて、他愛もない世間話に一時だつてかの女は高笑ひせずにもらなかつた。かの女は娘たちと一緒になつてゐることが非常に嬉しかつた。かの女には何故笑はずにもられないかが不思議であつた。

『原田の爺め！何時でも私にからかつてやがるんだよ。糞！人を馬鹿にして。』

なごと言つた。

『あんな者に惚れられて、やりきれやしない！』  
すると弟子の一人が、

『先生は姿色がよいから。』と艶っぽい聲で言つた。

ごつとお針子と一緒に笑つた。俊子はなんだかくすぐられてゐるやうな、又誇りを裏切られた時にでも感じる失望的な情にひたつてゐた。かの女はほんの暫く嫌な表情をした。が、かの女も笑つた。かの女は順に娘たちの顔色を窺つてゐた。

『あるひはさうかもしれない。』と俊子は考へた。

かの女は俯向いて仕舞つた。きはめて迅速にある痛ましい感情が襲つて、山火事のやうにその焔は胸一杯を占領した。かの女は惱ましさうに縫物の針を運んでゐたが、ほごんご絶望したやうに投げだしてしまつた。



しかしかの女は恁麼ことを考へた。

『私だつて、そんなにおいぼれでもないのさ。考へて見るが好い。原田の爺だつて、杉原の旦那だつて、あの嫌らしい金縁眼鏡の男だつて、みんな私に惚れてゐるんぢやアないか………私にはまださうした人間の強味があるんだ。若い者よりもさらに上手な。』

かの女はけれどもお針子の姿を見るに忍びなかつた。何故かその裏には皮肉な煽動が感じられてゐた。正直に考へて見ると、かの女の胸には雑多な感情が渦巻いてゐた。

俊子は凝つと押しつけるやうに、さて何等かの勝利を叫びたい心になつて、ある脅迫に顛へながらも肩をそびやかせたりした。どうにかしてその悲痛や侮辱を握りつぶしたいと考へた。だがかの女はすべてを否定することの不可能を知つてゐた。

『お嫁に行きなさいよ。』と若い職人の細君が呟いた。

俊子はびつくりしたやうにかの女を視た。

『何んと云ふ恐ろしい言葉だらう！』とかの女は心に叫んだ。かの女は鳥渡の間むきになつて憤つた。けれども直ぐに惱まじさうな、まつたく怒りから放れない淋しさに返つて來た。

『時間と云ふ直線の上を、無趣味に、確心のない、鳥渡見たところは眞面目にすべての者は愉快さうに驅出してゐるんだ。人生の目的がどうの、運命がどうのと切りにしやべる癖をして、彼等はなんと云ふ皮肉屋だらう。終局の時間がどんな形に切れてゐるか、どんな時に斷滅するか、彼等は考へても見ないくせに。』

俊子には辛辣な微笑が突然に浮んでゐた。

かの女は日露戦争に看護婦を務めてゐた。それは愛國婦人會から戰場へ送られ



たので、ほんの暫くではあつたが、かの女の言葉を借りて言へば——しかも救主のやうに——負傷者はかの女になつてゐた。

『私の肩に慙ふ凭りかかつて感謝してゐるんですもの。私もさう思ひましたわ出来ることなら永遠にこの職をつづけてゐたい、そして、すべての人を幸福へ導きたいと。まつたくのところ、私は一時すつかり女神になりすましてゐた程ですからね。』と俊子は言つた。

かの女は何時でも永々とその時の生活を語りだした。かの女はおきまりの微笑を浮べて、坐蒲團の端をつつきながら、

『特に先生は別嬪だから。』と側からは例の細君が相槌を打つてゐた。

『なんと云ふ皮肉だらう！』と俊子は叫んだ。

かの女は那麼時に限つて自分を明瞭に知ることが出来るのであつた。かの女は怒りと恐怖の混雜した感情に打たれた。そして、きはめて悲痛な、暗黒な人

間性を彼等から視ることが出来たり、さらに已れの現實性に疑ひを挿んだりした。

俊子は惱んだ。かの女は想像さへしたことの無いある考へが急に閃いて苛らしくした。しかも、地から湧いた出来事のやうに面喰はざるを得なかつた。かの女はまた氣の抜けたやうに天井を仰いだりした。

二

ある日、それはお針子が引上げてから約二時間ばかり後のことで、かの女は鏡の前に座つて永い間身動きひとつしないであつた。凝つと自分の姿を視詰めてゐると、胸底からこみ上げるやうにして哀愁が傳つて來た。それについて、淋しさと、腹立たしさと、疲勞さを感じた。



俊子は泣いてゐた。始めはほんの少し、嚙みつぶされるやうな嗚咽であつたが、思索はだん／＼その情を煽りたてて、しかし二分間とは續かない激しい旋律がからだ一帯にひろがつて行つた。

俊子は鏡臺の端をしつかり握つてゐた。地の底を流れるやうな慟哭が靜かな空氣にふるえて、しかしそれも折々、内部にはきはめて力強い血の流れを感じてゐた。

「先生、先生！」

その聲はまつたく俊子には聞きとれなかつた。かの女は涙と白粉と皺のため、にひごく穢れた顔を仰向けにしてゐた。かの女は雙手を高く挙げたりした。あゝるひは没意識の状態になつて首垂れてゐた。かの女の眼は興奮して物凄く、手入れをしない額の後れ毛がその調子を一層つよめた。

かの女は靜かに振向いた。其處にはしよんぼりと秘藏弟子のお峯が突立つた

まま、やるせない表情で自分を凝つと視詰めてゐる。かの女は直ぐに笑つて見せた。そして、今度は仰向いたりした。

お峯はさつき訪ねて來たので、その時はすつかり泣崩れてゐる師匠のさまをはつきり見ることが出來た。かの女は恚ふした嗚咽を幾度もなく聞いてゐた。それはきつと夕靄が南の空にたなびくやうになつてからであつた。

お峯はそつと隣室の壁に寄りそつて、しばらくの間俊子の様子を窺つたりした。かの女は名狀しがたい不安の念に襲はれ、つひで恐怖を感じた。かの女はひそかに首を出して俊子の後姿を覗いた。

『何うしたんだらう！』

初めの内は譯もなく悲しくなつた。そして、啜泣きしながら師匠の側へころげこむのが例で、かの女は感激に燃えた瞳で凝つと俊子を見あげたりした。

この時、お峯は決して泣いてはゐなかつた。ある珍らしい誘惑心が起つて來



たり、それとは反対に、何か見てはならないものに觸れたらしい威壓を感じてぐつと黙りこんで仕舞つた。

『先生！』とお峯は叫んだ。が、それは小さな、おまけに顫えを帯びた聲であつた。

かの女はいら／＼してゐた。

かの女は毎日のやうな俊子の嗚咽に、もうよほど前から恐怖を感じてゐた。お峯は他の事柄のやうに馴れて無感覺になりはしなかつた。ます／＼不可思議な、さらに進んで言へば、けたたましい呼鈴の音に不安をいだく時のやうに、しかしそれは未知の世界から来る一種の謎で、不可抗力な焦燥であつた。

お峯は師匠の膝に手を置いてゐた。かの女は盗むやうに鏡を覗いた。

何んと云ふ形相であらう。何んと云ふ底氣味の悪い表情であらう。大づかみに言へば、惱まし／＼さうな、痛まし／＼さうな、が、それでもない……お峯は大

聲に救ひを求めた。しかし聲は咽喉をはなれなかつた。かの女は再び熱病患者のやうに顫えてゐた。

『峯ちゃんは若い！』と俊子は突然に叫んだ。

かの女は更に何事かを呟いたけれど、恰度その時、お峯はすつかりのぼせてゐたので、それが何んのことであつたかかの女には聞ききれなかつた。

『何うしたんだらう！』とお峯は言つた。  
暫くしてから、

『何う考へたつて、恁麼に貧弱な體にならうとは思へない。』と俊子は嗚咽ぶやうに言つた。そして、だん／＼凄い、物思ひの沈んだ表情に變つて行つた。

『お免なさい、お免なさい。』とお峯は叫ばずにゐられなかつた。

かの女は脱れるやうに表へ飛びだすと大聲に泣きたてた。顔はすつかり赤くはれて、ぶる／＼と絶間なしに體をふるはせてゐた。が、決して四邊への氣兼



は無用であつた。側には板塀つづきの大家ばかりが控へてゐて、窓の近い屋敷でも、松や檜の植込みでまったく別な世界であるやうな気分がしたから。

あまり興奮した爲にかの女の顔は惹きゆがんで見える程であつた。

翌朝かの女は極度な好奇心に驅られてゐた。もつとも、昨夜の強い刺戟に惱まされて、目醒めた時は可成り胸苦しかつたけれど、そして、頭痛が全身にまで影響してひどく疲れてゐたけれど、お峯は敢て、それも特別早く稽古に出掛けて行つた。

『まるで夢のやうだ！』とお峯は言つた。

かの女は晴々した俊子の様子に驚いた。かの女はもう一度注意して視詰めたりした。そして一種の失望を感じながら、かうした晝夜の對照が如何にも不自然でならなかつた。かの女は俊子がすでに縫物にかかつてゐることが憎らしかつた。

その後お峯は毎晩のやうに師匠の家を訪ねた。かの女は憎悪と復讐の念にかられてゐた。左程でもなかつた俊子の高笑ひが悪らしくなつたのも其頃からで稽古のあひだ一度でも浮いた顔をかの女は見せなかつた。かの女は常に師匠の振舞ひを熱心に觀察してゐた。

けれどもかの女は恁麼ことを言つた。

『私は心から同情してゐるんですよ。』

そしてお峯は眼に涙を一杯たたへてゐた。

### 三

『若い者から離れるとなせ恁麼に物悲しいだらう。なせ恁麼に失望と疲勞を感じたらう。私にはまだ元氣もあれば、そんなに年寄りでもないんだけれど。』



俊子はさらに恚ふ考へた。

かの女は若い男女が肩を寄せながら歩いてゐるのに出會ふと、直ぐに引返して來た。たとへそれが何んの興味を惹かないにしても、かの女はけつして行きすぎやうとはしなかつた。

俊子は彼等の後をついて行つたりした。けれども、一分間か二分間ののちには、自分と云ふものがはつきりしすぎる程意識されてゐた。かの女は苦笑した。とりとめもない皮肉が口元に浮んで來た。

『なんだ、莫迦くしい！』とかの女は驅出しながら呟いた。

俊子は騒々しい人込みがたいへん好きで、夜店や縁日は始終おなじみの方であつた。かの女はさうしたためまぐるしい雑踏の中から、ほこりだらけの空氣と群衆の惡臭で押しつけられるやうな胸苦しさを感じながら、足も充分には立てられぬ危険な場所に一種の慰安を得た。かの女はそんな時には何時でも誇張

的な感情にしたしんでゐた。ことに若い男が自分の肩に觸れたり、うしろから押された場合に、それが若い男の方であつたことに氣づくこと、かの女は云ひやうのない満足を感じた。

『私は別嬪だ！母も別嬪だつた。まったくの話が、この大勢の人ごみで私ほど美人はないだらう。私にはこんなに綺麗な齒並みと、こんなに高い鼻とがあるぢやアないか。それが全体の調子を非常に品よく作りあげてゐるんだ。そして誰れもがそれを証明してゐる。』

けれども、俊子はその自信を傷つけられることが度々あつた。

ほとんど絶望に近い悩みがかの女を襲つた。ちやうど眼の前には、女ながらうつとりせずにはゐられない、一見藝者あがりと考へられる女が、傲慢ちきな歩き方でひどく様子ぶつてゐた。そのすぐ横には、これも憎らしいほど釣合ひのそれな男が立つてゐた。二人の手は堅く握りあつてゐた。女は男の肩に凭り



すがつて、その眼と眼を折々交してはニツと頬笑んだ。

『なんと云ふ態だらう!』と俊子は吐出すやうに呟いた。

かの女はしかし憎悪の情に苦しんでゐた。かの女はこの時ほどはつきりした印象をもたなかつた。かの女は全く病的にふるへながら家に歸つた。

部屋に這入ると、かの女は死人のやうに身動き一つしないので、その大きな険しい眼を見張つたままでゐた。

『くたばり損ひめ、この大馬鹿者。』

そして俊子はありつたけの力で腕を抓つて見たりした。

到々翌日の稽古は休むことになつた。かの女は蒲團をひき被つたまま決して弟子供に顔を見せなかつた。かの女はすつかり熱にうかされてゐた。體中は汗でびしょくしてゐるし、その悪臭がさらに頭痛の原因であつた。

『よして呉れ、よして呉れ。』と俊子は怒鳴つた。

お針子は憂はしさうな眸を集めてゐた。

『ほつどいて呉れ!』

すると居合はせた多くの眼は同時にかがやいた。

『まあ! 何うしたんでせうね。』と呉服屋の娘は呟いた。

『看護するのが氣に入らんのですよ。』

『まさか!』と疍高い聲がした。

しかしお互ひの心には不安な状態が永く續いた。

『お峯ちゃんも知らない?』

『まるで狂人のやうだわね。』とお針子の一人が額に皺を寄せて言つた。

『お前たちは私に見せびらかすつもりだらう。いや、きつとそれに違ひない。

私はお前たちにはかなはないよ。威張れ、ふん、威張つて見る。直ぐをいぼれる癖に。』と俊子は突然にけはしい聲で叫んだ。



『たしか昨晚……』と若い職人の細君は意味ありげに笑つてゐた。

『熱ですよ、まったく熱の勢ですわ。』

暫くして、

『なんでもないことなんでせうよ。』と再びお峯は聞きとれないくらひに呟いた。

一時間の後には、彼等はことごとく看護に疲れてゐた。むしろ、折々師匠の口から吐出される狂的な言葉が妙な淋しさをさそつて、手のくだしやうもない病人の枕頭に座つてゐることが彼等には苦痛であつた。彼等は話合つたやうにこそくと逃げて行つた。

俊子が裁縫教授を撥してから、かの女は思ひがけなく上野公園でお峯に出會つた。

その頃俊子はしばし眩暈に襲はれた。また、はげしい疲勞も感じたり、まったく意外に衰弱もしてゐた。その上、かの女には孤獨と沈黙の不愉快な日が続いて、どうかすると異常な興奮がつきまどつた。

『ひと思ひに死んだら……』とかの女は口癖のやうに呟いた。

かの女はすつかり氣力がなくなつて、抵抗力や欲望もだん／＼かの女から遠のいて行くやうに思はれた。だが、かの女はあてもなく歩きつづけ、あてもなく考へに耽けることが好きであつた。

かの女は森の中か、それとも人通りの少ない海岸を歩くのが常で、云ふまでもなく、其處に起る雑多の現象がびつたり俊子の氣分に合つてゐたには相違ないが、かの女はさうした時にいつでも、

『お峯は若いんだ、まったく若い。』と叫ぶ。

それから、



『何が幸福だ、何が！』と顫えながら泣くのがおきまりであつた。

かの女は凡ての生活を破壊しなくてはならないやうに苛らくしてゐた。

恰度、お峯もこの時師匠が前から自分の方へ進んでゐることに氣づかなかつた。もつとも、俊子は直ぐ右手の雜木林を曲つて出たので、ことに俯向いてはゐるし、お互に眸を交はす餘裕がなかつたと云へば云はれる。

『先生ぢやアなくつて？』と、かの女はやがて注意して泣いた。

けれどもお峯の考へでは、俊子が自分達に氣づかないやうにと願つてゐた。

お峯はある若い男と列んで、一面には師匠から受ける恐怖、また一種例へやうのない羞耻の混雜した感情に襲はれながら、凝つと窺むやうにして、俊子の行過ぎるのを待つたりした。

『誰れだい？』と伴れの男は泣いた。

『……………』

『なんだか氣が變ぢやアないか？』

『裁縫の先生よ。』

お峯は俊子がかかり離れたのを見て小聲に囁いた。

かの女はちよつと身ぶるひして、それからもう一度俊子の後姿を眺めてやつと落付きながら、

『まあよかつたわ。』と言つた。

でも、彼等は急ぎ足に東照宮の前を抜けて、交番の横にあらはれた。

二人はさまざまな表情で、出来るだけ快活に、出来るだけ相手を惹きつけるやうな話をして得意がつた。そしてお峯までが、もう何事もなかつたやうに平和な顔つきでゐた。

『僕だつてさうだよ。』とその男は急に嚴肅な口元をしながら、

『もどく、戀くらひ皮肉なものはないね。僕は何時でもさう思ふんだ。戀は



人生を美化すると云ふが、何んぞはからん、戀は常に背景として忌々しい惱を  
ともなつてゐる。だから………』

『それはあなたの考へちがひよ、戀の本質は那麼に悲しいものぢやアないわ。』  
『はは、峯ちゃんはまだく詩人ですね。』

若者は媚びるやうな眼つきをして、さて彼はお峯の手をこわく握つたりし  
た。

その時お峯は不圖自分を呼ぶ聲に氣がついた。と、まったく突然に、かの女  
は血相を變へて、また、うしろを振り向きもしないで、不忍池に通つてゐる坂道  
をどん／＼走つた。

『峯ちゃん、峯ちゃん。』と呼ぶ聲が再びうしろに聞えた。

若者はあつけにとられてゐた。

『何んのことだい！』と彼は呟いた。

しかし、その聲が次第に近寄つて來ると、彼は自然にその聲から物凄く、驚  
きと惱みの入乱れた感情に襲はれねばならなかつた。彼はもう一度注意して振  
返つたりした。其處には俊子が思出したやうに駆けながら、また、躊躇するや  
うな足踏みで疑つとこちらを視詰めてゐた。

『何うしたんだらう？』

彼は意外な事件の進行を想像に描いて見た。そして、われ知らず身顫ひが起  
るのを感じた。

『あなた、もしあなた。』

と俊子は怒鳴るやうに、

『お峯を出して下さい、お峯を、お峯をどうか私に返して下さい。』

『何んのことです？』と若者は更に驚いて叫んだ。

『いえ、お峯をどうか私の手に返して下さい。私をひとりぼっちにして、お峯



をつれて行つては嫌です。ほんごに嫌ですわ。」

そして、俊子は眼に一杯涙を宿してゐた。かの女の顔はこの上もなく蒼ざめて、その頬や下顎のあたりは見るかげもなくげつそりしてゐた。勿論、何日目かの束髪はひどく無氣味に思はれた。

かの女はしかし思ひかへしたやうに、

『私もお仲間に入れて下さい。』 などと言つた。

若者は黙つてじろくかの女を視守つてゐた。

『そんなに逃げなくつても好い。』

俊子は若者に追ひすがるやうにして、しかし、直ぐに絶望が閃いてかの女は立ちどまつた。

『やすらかな死よ!』 とかの女はまつたく無意識に叫んだ。

かの女はいつものやうに、きはめて悲痛な感情がとりとめもなく湧きだして

來るのを知つた。かの女はながい間若者を見送りながら、やがて、云ひやうのない呪咀と怨憤のはげしい興奮が襲つた。

かの女は仰向いて、長い間其處で黙禱をつづけてゐた。



ある慈善家

(大正八年七月作)



『何うしたんだ！何をしとる。』

『酒は何うしたんだよ？』と彼はむせながら怒鳴つた。が、心はしだい涙にくましくなつて、彼の胸には、孤獨と悲痛の暗影が押しつけるやうにひろがつてゐた。

『うす野呂だつて？或はさうかも知れない。この通り妻にも馬鹿にされてるぢやないか。』

彼は考へるほど頭の中がざくざくして來た。ひどく頭痛がする。また、何者かが夢のやうに自分を虐げて、少しもそれに抵抗することが出来ないもどかし



さを感じた。彼は人を擲りつけたいやうな、それとは反對に思ふさま己れの體をしばり上げたい心持ちにもなり、かうした表面的には安泰な住居に、今は一秒もゐられないと云ふ切迫した氣分になつたりした。のみならず、さぐるやうな妻の眸がこの場合非常に不愉快な感情を興へた。

彼は驅出すやうにして通りへ出た。まだ宵のめまぐるしい下町の往來であるその霧雨にしつとりしてゐる中を、秀夫はあてもなく歩きつづけた。彼は先づ電燈のうるんだ光りを見た。たちまち泥水をはねて飛ぶ自動車は彼の横に現はれた。電車は次から次へ追ふやうに走つて、人足もいそがしさうにその間を縫ふてゐる。折々、けたたましい警笛が其處此處に聞えた。

彼はやがてある停留場まで來ると、もうそろ／＼倦怠を覺えだして、ふと立止つた。もつとも、彼の前には大勢の人間が走りまどふてゐたし、幾臺も幾臺も電車が立往生の形で、譯もなく彼の好奇心をそそつた故でもあらう。が、よ

く見ると、迂散な眼を光らせた巡查や、人ごとなら一向とんちやくしないことつた風の男、小さくなつて濡れしよばれた女などもあつた。中には彼の様子をさぐるやうな眼つきで眺めてゐる者、何やらこそ／＼嘔きあつてゐる者が眼につひた。

彼はまた歩きだした。彼にはこの雑踏があまり強く響かなかつた。無意味な展開圖のやうに、ただあたりがざわ／＼してゐることがぼんやり意識された。しかし、何處となく淋しさうな店の構へや街道が、彼のいら／＼した氣分を一層高めるのであつた。

彼は始終咬いて、俯向きなさら、ほとんど夢中になつて歩いてゐた。彼は今自分が何處をさまよふてゐるのか、どうして傘なしで此處まで來たかも考へなかつた。彼は足の向くにまかせて、すん／＼須田町から萬世橋の方へ辿つてゐた。ただ無闇に歩かねば氣がすまないの、如何なる危険な進行物にも一向注



意を拂はなかつた。決して恐れもしなかつた。もつと正直に云ふと、彼は自分から望んでも、衝突と云ふ氣持ちの好い事件を惹起したいと願つた。

彼はしかし、凡てのものが自分を避けてゐることに氣がつひた。たまく、一直線に自分を目懸けて突撃するものがあつても、遠くから警笛によつて死の恐怖をいだしめやうとするに過ぎない。また、いよ／＼その瞬間に迫つて來ると、彼等はあわてて進行を中止する。生と死の間をぶらついてゐる人間にはとてもこれ以上の振舞ひは出來ないものか。その上、運轉手は興奮のあまり蒼くなつて、顫へながら、

『馬鹿!!』と叫ぶ。

それからやつと氣をしづめて、

『氣をつけろい。馬鹿野郎!』と怒鳴るくらひが關の山である。

『彼等はなせ俺れを突飛ばしては呉れないのか、ひと思ひになせ息の根を絶つ

ては呉れないのか。』

彼は言ひやうのない淋しさが急に胸をついて起るのを感じた。

見渡す限り一面の往來は電燈を浴びてぎら／＼光つてゐた。相變らずの雨で先刻からの風はこの時かなり激しく彼に迫つた。

彼はふと、上野あたりまで續いてゐる電柱の、その一つ一つについてゐる燈火を眺めて、いつもにない物悲しい沈靜の氣分になつた。また吸込まれるやうな、まるで夢を見る心で、彼は小さくなつてゐる、そしてしだいに接近した電燈を視詰めてゐたが、やがて彼は再び泣きだしさうになつて歩き出した。

彼はもう衝動の命ずるがままに歩廻ることを喜ばなかつた。どうかして泌々考へて見たく、また人間との交渉がこの際によりも慰安になるだらうとも思つた。

『をい／＼。』



彼は人なつかしさうに、洋食屋に這入つて椅子に腰を下すと慥ふ言つて仲居の顔を覗いた。

『お前はものの道理をよく知つてるね？さうだらう……俺れをうんと虐めて呉れないか！俺れは今、體の置場に因つてゐるんだ。後生だからありつたけの力で、この瘦せた頬を打ちのめして呉れ。』

しかしその女は相手にしなかつた。さつき暖簾をぐぐつて傾けたウイスキーの匂ひが鼻について、一目見ると癖の悪い興奮があきらかに知られた。彼の耳や烏打帽子はもちろん、顔までびつしよりしてゐた。そして、底光りのする眸や、蒼ざめた皮膚の色がかの女には物凄かつた。

仲居はしひて笑つたりした。たいていは遠くからじろく眺めてゐたが、それでも折々麥酒の酌をして、

『ほほ。』態ごらしい頬笑みを見せた。

『畜生！』

彼はしかし怒るだけの氣力がなかつた。

側にはかなり酔ひのまはつた學生の群れが一组あつた。彼の這入つた時にちよつと此方を見たが、時々秀夫には意味のわからないことを言つて、ごつごつと緒に笑つたりする。仲居にもちやほやされて、下手な清元を得意さうに聞かせる男もあつた。彼はなんだかくすぐられてゐるやうで、皮肉を言はれるやうで例の癩癩がむらくと起つて來た。彼はその興奮した眼できつと彼等を視詰めた。

秀夫は突然食卓を叩いた。まったく怒りの極に達したやうに、だが、彼は直ぐに辛辣な頬笑みを浮かべて、今の物音にびつくりした多くの瞳を心地よげに眺めた。また、ほんの瞬間ではあつたが、急にひつそりした料理屋の氣分がひどく氣に入つてゐた。



學生の騒ぎは二分間と絶えてはゐなかつた。けれども静かに聞いてゐると、彼等の笑ひは單調で無邪氣であつた。ただ笑はずにはゐられない春青の高調であることに氣がついた。

『をい、其處の書生君、俺れも一緒に笑はして呉れないか!』

さう言つて秀夫は聲高に笑つて見た。しかし彼は急にがっかりしやうで、コップをささげながら熱涙が頬に流れた。

『君たちはえらい人間なんだ!』と沈んだ聲で彼は呟いた。

『ほんどうに君達は俺れを信じて呉れるだらう。俺れの云ふことが悉く理屈にあつてゐると云ふだらう。けれども、俺れは馬鹿者だ。薄野呂なんだよ。人のために始終骨を折つてゐながら、それで絶えず迫害されてゐる。爪はじきを受けてゐるんだ……本當の話が、俺れは自分を馬鹿者とは思つてゐない。慈善家なんだ。をや、君たちは笑つてゐるんだ……しかし君たちにはかう

云ふことがわかるまい。眞に慈善的な行爲は、今の個人主義的な見解からは非常に愚なことに思はれ、また個人主義的の公利主義からは容易に理解されると考へてゐるが、實は大きな誤りで、そんな打算からこの行爲が生れるものでないと云ふことが。けれども此處に一つの難關がある。と言ふのは、この行爲が社會心理と一致するかどうかの問題なんだ。が、まあ那麼ことはどうでもよいとして……とにかく君達はえらい人間だと俺れは思ふね。そして、このんだくれの慈善家に充分同情してくれるだらう。人の善い、なぶりものにされた男を……しかしあるひは頓馬野郎だと罵るかも知れないね。』

そして彼は頼母じさうに學生の顔を眺めた。

何時の頃であつたか、矢張りこの裏切られた悲痛に惱まされてゐると、その時は妻を前にをいてぐひぐ自暴腹に酒をつめてゐたが、故郷から一通の電報



を受取つたことがある。

『金があるかい？』と秀夫は妙に沈んだ調子でたづねた。そして投げやるやうに受信紙を置いて妻の顔をじろりと見た。

『こんな時に金の用意がなくつちやア困る。』

『あなたは本當に無鐵砲だから！』と妻は言つた。

電文には叔父の危篤を知らせてあつた。彼が幼い時にもらはれた母の弟で、その後事情があつて其家を出た。しかし、叔母の歿後は非常に可愛がつてゐた。こちらからは餘り遠方であるため、筆無精なために何時でも音信を怠りがちであつたが、叔父からは凡ての相談を持ちかけて、出来るだけ秀夫の意志を尊重してゐることが明に知られる。彼はその事を常に頼みに思つてゐた。彼は感謝のあふれた眼で凝つと叔父の手紙を視詰めたりした。

『死水はお前に頼むよ。』と叔父は言つた。

『とにかく工面をせんけりやならん。』

さう言つて彼は表へ飛出した。しかし金の出来さうなあてはなかつた。何うかすると以前世話をしてやつたOやKが頼母しく思はれて、つひ彼は其方へ歩みを運んだりしたもの、失望して歸る見窄らしい姿がまざ／＼と見えるやうな氣がして、直ぐと仰向きながら横道へそれて行つた。

『あいつらだつて松本と同じなんだ！』

彼はぶく／＼肥つた髭のない松本の顔を思ひだしてゐた。はじめはその顔に哀訴するやうな痛々しい色があつて、それがだん／＼嚴肅な表情に變つて行く。皮肉にかがやいた、狡るさうな眸を凝つと此方に向けて、今度はゲラ／＼笑ひだした。

『畜生、畜生。』と秀夫は驅出しながら叫んだ。そして、兎ある大通りに出る。彼は振りかへつて板塀つづきの暗い路地を視詰めてゐた。



「お前は恩を忘れたんだな！そして俺れを苦しめるんだ。あの時お前が俺れに救はれなかつたら……いや俺れはあまりお前を救ひすぎた。俺れはお前をうんと虐めてやるよかつたんだがね。しかし、俺れは身すばらしい放浪者をそのまゝ追ひたてる氣にはなれなかつた。あの垢だらけの着物を見た時、頬骨の高くなつた、すべつこい顔のお前を一目見た刹那に、俺れは自分で何うすることも出来ない程、同情に胸が跳つた。そしてあれ程までにお前の便利をはかつたり、また引立てゝやつたぢやアないか……俺れはお前から侮辱されやうとは夢にも考へなかつた。馬鹿者にされやうとは思はなかつた。因果の筆法から推して行くと、お前は少くとも俺れに屈従すべきだ。俺れはお前にあざむかれやうとは考へなかつた……お前は賢い人間で俺れが馬鹿者のせいだらう！」

彼は松本の幻影に向かつてかなり執念深く呟いた。

何うかすると、

「お前は何故かう俺れの生活にびつたりくつついてゐるんだ。色々な表情で俺れを何時まで呪ふつもりだ。どう云ふ理由から俺れを苦しめやうと考へだしたんだ……俺れはお前が食客のときから、人間として少し足りないよ云ふことは知つてゐた。が、こんなにまで馬鹿のさか怨みを受けやうとは思はなかつた。」と聲をあげて秀夫は罵つたりした。

彼はもう金の奔走には厭いでゐた。むしろさうした明瞭な意識もをこらさないで、出来ることなら人通りのはげしい往來のまんやかにすはつてゐたいと考へた。高踏的なその場面がいかに愉快だらうかと思つて。だが彼はまだ苛らゝしてゐた。

彼はてく／＼と歸つて來た。ただ自分自身をたよる外はないものと諦めて、しかし彼は非常に疲勞してゐた。腹立たしさに呼吸までがなみはづれて忙しさ



うであつた。

「俺れはほんとうに馬鹿だつた。これからは人を救つたり、餘計な世話やきは一切お免だ！」と彼は妻に媚びるやうに言つた。

「しかし、なんと云つても社會の奴等はひどい。」

「今さら！」と妻は罵るやうな、嘲弄と少しばかりの憤りが混じてゐる表情で彼を見た。

「田舎へ歸るのもよしなさいよ。ろくでもない。叔父さんの方へは見舞狀でた  
くさん……………」

秀夫はさらに考へた。彼は凝つと妻の眼元を視詰めてゐると、ごくさした理性を静かにはたらかせやうと努めると、なんだか自由を押しつけられるやうで、また妻の心が見えすいてたまらなく嫌であつた。

彼の胸にはきはめて迅速にある惱ましい豫想が閃いた。

『外のこととは違ふよ。叔父さんは俺れをどれ程力に思つてゐるか。』

しかし秀夫はこの場合決して叔父の病氣を氣使つてはゐなかつた。彼は少からず妻の言葉が癪にさわつてゐた。彼はかうした慈善後の惱みが、なかばは妻の口つきに原因してゐることを知つた。彼は興奮して眞蒼になつた。

『あれだ！』と妻はさげすむやうに言つた。

『もう氣が變つたのね。』

『なんだつて！もう一度言つて見ろ。』

『いゝえ、なんでもない。』

かの女のすねた口振りを聞くに秀夫は我慢がしきれなかつた。彼の腕はいきなり女の頬に飛んだ。彼はその手で再びかの女を突きとばして、今度は立上りさま妻の腰を存分に蹴返したりした。

『もう一度言つて見ろ！』と彼は怒鳴つた。



彼は妻が泣伏してゐるのに気がついた。女は苦しきうに喘ぎながら、すつかり秀夫に體をまかせてゐた。彼にはそれがいかにも悲しく感じられて、筒立つたまゝ凝つと妻の様子をながめた。

『馬鹿!』

だが秀夫は慙ふ叫んだ。何故か彼も泣出しさうになつてゐた。

彼の理性は再び動いた。彼は箆笥の前にたゞずんで、目星しい衣類をことごとく引張り出してゐた。自分の物としては大島紬が一重ねあつた。よく見ると繻珍の丸帯や寶石入りの帯止め、それから鼠縮緬の紋付などが一緒になつてゐた。彼はちよつと振りかへつて妻を視た。其處には依然として痛々しい女の姿が横たはつてゐた。

『これ〜!』と秀夫は呟いた。まつたく涙聲になつて、

『をい、これをお前に買つて來たぞ。どうだ、よすぎるだらう。』

三越呉服店から買つたまゝの反物を投出しながら、さう言つてしげ〜妻の顔を眺めた時の快感を彼はふたゝび呼起してゐた。

彼はしづかに甘い回想に耽つた。彼は妻が鏡の前に立つて何時でも帯や襟首に心をうばはれてゐるところを考へた。かの女のでつぷりした體はまるで魔物のやうに秀夫の心をそそつた。のみならず、衣類の調和がいかにも上品に見えるたことが嬉しかった。彼はなにかを見物に出掛ける時に、二人列んで歩くことがこの上もない楽しみであつた。彼はなんのためにかくまで上機嫌で居られるかが不思議でならなかつた。實際の話が、彼は妻の様子が憎らしい程美しかつたことを覚えてゐる。そして満足げな妻の表情も彼には得がたいたまものであつた。

『よく似合つて?』と妻は言つた。

『すつかり貴婦人だ。』



彼がさう云つて妻の肩から横顔を覗いたときに、かの女はニツと嬉しさうに頬笑んだ。

『なんと云ふやさしい表情だらう。』と秀夫は現實のやうなよろこびを感じてゐた。彼はまるで三十分前の苦惱を忘れたやうに。

急に痛ましい感情が彼を襲つた。彼は妻を恐れく側目に見たりした。實を言ふと、彼はこの時ほど責任の感に打たれたことはなかつた。

『質屋へ還ぶんだ!』

彼はさう考へただけでも涙がこぼれさうであつた。

『なんと云ふ情ない男だ………ごん底をさまよふ人間ほど悲惨で、また力強いものはない。』と泌々その時彼はさう思つた。

二

彼はつひに叔父の家へ向けて旅立つた。そして約一ヶ月ばかり過ぎて東京へ歸つて來た。彼が田舎から歸つた時に、驛には思ひがけない出迎への人が五六名あつた。見ると狡るさうなKの顔や、あまり口を利いたこともない近所の婆さんが加はつてゐた。なんだか妙な服装をした男もなれくしくちかよつて來た。

彼は改札口を出ると、あのかがかやかしい構内の電燈をあびて、不審さうな、しかし、喜びを禁じ得ない表情で皆の者と顔を合せた。

『すいぶん手間取つたのね。』と妻は言つた。

『到々なくなつたから………不在中なにも變りごとはなかつたかい?』

さう言つて今度は他人の方に向き、

『色々とお世話になりました。』

だが心中ひそかに皮肉を感じた。彼は苦笑しながら出迎人の眸を避けるやう



にした。それもしかしほんのしばらくの考へで、直ぐに思ひかへして丁寧一人／＼を注目した。彼は人間と云ふ者がかうまで見え透いた心を持つてゐるのかとさげなく感じた。彼の眼には人間がごく小さく見られた。

『でも、叔父の遺産をついだことが何うして彼等に知れたらう!』

『あなたが島田さんですか? 私は救世軍の木村と云ふ者ですが、どうぞよろしく。』と例の妙な男が口を開いた。

『おいでた、おいでた。』と秀夫は叫ばずにはゐられなかつた。

『これだから油断もなにも出来やアしない。もう俺れは懲りてゐるんだ。やすやすとそんな手にのつてたまるものか!』

彼は氣のない返事をしてすた／＼歩きだした。

家に着くと、故郷の變つてゐたことや、叔父はまだ生きてゐたこと、そしてどんな風に病氣が重くなつて行つたかと云ふことまで話した。彼は最後に、叔

父の遺産全部を相続するやうになつたとつけ加へた。

彼は誇りをあきらかに現はしてゐた。まつたく一變した態度で妻を見ることが出来た。

『矢張り行つた方がよかつたのだ。』と秀夫は勝利を叫ぶやうに言つた。

彼はさらに多くの出迎へを媚びの行爲に解釋したかつた。少くとも、彼にはさう感じられた。彼が改札口に立つた時の印象を考へだすと、出迎人が一樣に頬笑んでゐた事實を否定することが出来なかつた。彼はその笑ひがなんのためかを即座に知つた。少しの疑ひをはさむ餘地がないと考へてゐた。

しかし、彼はわざと仰山さうに、

『横丁の婆さんは何んと思つて出迎へて呉れたらう。それに、Mや救世軍の人が驛へ來てゐたのには實際驚いた。まさか俺れが叔父の遺産をついだと云ふことと知つたる譯でもあるまい。』と言つた。



『それは事實なんですか!』

妻はほとんど信じられさうにないと云ふ風に驚いた。かの女はまったく夢のやうな事實に名状しがたい喜びを感じた。

『それが本當だつたら。』と妻は言った。

かの女は秀夫を視詰めて、さらに眼を窓の方へ轉じてにつこりした。後になつて考へだすと、彼はこの時ほど優美な妻の表情を見たことがなかつた。

『拾ひ物よ、なにかの因縁ですわ。』

『因縁?』

『きつと、あなたの慈善に天が報ひたのよ。』

かの女は妙なところへ力榴を入れて言った。恁麼ときには何時でも使ふ商人的な眸をかがやかして。だが、この場合秀夫も悪い氣持ちはしなかつた。彼はあらゆる聲を張上げて己れの幸福をうたひたかつた。前途はあかるく、振返る

と過去もその道程であつたやうな満足が感じられた。

『因果の法則ほど普遍なものはないね。神はすべてを知つてゐるんだ。すべてに正當な解釋と報酬を下してやまないのだ。俺れは馬鹿者ではなかつた。俺れは神の意志に従つてゐるんだ。』

さう言つて秀夫は頬笑んだ。

『松本だつて、その外俺れを愚にした野郎は今に思ひ知るだらう。きつと好いことはないから!』

彼は實際さう信じてゐた。この度の出來事によつて充分証明もできると考へた。彼はあたかも猶太人がメシヤの再現を信じてゐる程度に、永遠の眼で見ることがただ一つの豫備條件だと考へた。

妻も合槌を打つた。かの女はKが秀夫の歸る日の正午頃にひよつこり訪ねたここや、入れかへに救世軍の者が三人づれで來たが、それはある貴族の照會狀



を持つてゐたと告げて、

「あなたの名前もだいぶ社會にみとめられてゐるんですわ。Kさんだつて、あなたが思つてゐるほど恩知らずでもなささうよ。」と喜ばせたりした。

妻の發議で牛込の方へ移つたのはそれから間もなくであつた。神樂坂で電車を乗りすて、牛込館の前を通りぬけると、其處からは眞直ぐに秀夫の家が望まれてゐた。塀ぎわには榎の大木がこんもりと茂つて、玄關先には櫻や青桐の新緑な姿が程よくあんばいされてゐる。一帯が野趣に富んだ庭のかたちで、彼の好きな躑躅の植ゑこみは南向きの部屋から最も美しく見られた。その側の鉢棚には華奢な西洋花が五色の光りにかがやいて、生々した初夏の氣分を其處にもはつきり浮かべてゐた。

彼は毎日に庭園の腰掛けに凭つて甘い回想にふけつた。以前はある商人の住

居であつたと云ふこの茂みの中で、きび／＼した光りを、それも力と愛にみちた陽を浴びながら、秀夫は人事のやうな生活にしば／＼うつとりした。

「俺れは幸福だつた！」と彼は叫んだ。

彼には過去の悲痛が悉く美化されてゐた。少くとも造兵の官僚生活から脱し得ただけでも、且つ叔父の遺産を續いたことは必然の結果であると思へるまでに……彼はもう社會を呪つたり、自分を愚にした多くの人々を怨んではゐなかつた。人の好い金持ちであるやうな満足さへ感じられて、この上にも彼等を救つてやりたいと考へた。彼には自分が神の使徒であると思ふ誇りも起つて來た。

秀夫はかうした晴やかな氣分をうたふつもりで、ある日知人を招いて宴會を開いたことがある。もちろん彼の生活に關係ある者と言つては造兵の仲間にすぎなかつたが、官吏や助役、それから同輩の級長が五六人と、部下やその他で



都合三十名ばかりはあつた。

庭園には恰度芝居の舞臺で見るやうな天幕が張られてゐた。空には銀色の雲がいくつも浮んで、その間からはまだ左程でもない陽の熱と光りが差込んでゐる。萌えさかつた樹々の葉裏は折々感激をそゝる閃きと變つて、また凡ての物象を通じて自然は豊潤な樂曲を奏でるらしく、凝つと耳をすませば其處には蜜のやうな囁きが充分に感受された。

秀夫の顔にはもう一杯に得意の色があふれてゐた。彼は仰向いたり俯向いたりして、その骨太につくられた五体を盛んに動かしながら、足に力を入れてぐツツと地面を歩んで見た。

『君くらの幸福な人間もなからう。』と顔をあはせる度に友人は祝つた。

この日、彼は一度でも沈んだ調子を見せなかつた。細君はもちろん、友人の多くは彼を取巻いてわい／＼言つたし、彼にも頗笑ますにはゐられない衝動が

胸の底からひよい／＼と浮んで來た。

秀夫は賓客を丁寧にし、そして應揚にあしらつた。彼はまた鳥渡立つて一同の者に挨拶したが、その時の満足は聲にまではつきり現はれたことを記憶してゐる。彼はその席でも言つたやうに、神の使徒をもつて己れの理想としてゐた。そして、世間からちやほやされることにも興味を覺えて來た。

ある日、それは梅雨期にありがちな、妙に心が沈んで、からだの部分／＼が別々なだるさを感じてゐる正午前であつた。臺所の方にはさかんに水音がしてそのあひだ／＼に女どもの高笑ひや、相手にからかつてゐる言葉が、夢のやうに、しかししんみりと聞えて來た。

秀夫はなにかしら心をそゝられるやうでつひ縁側に立つて下を覗くと、其處には二十才ばかりの男が、キャベツや胡瓜の雜然と這入つた籠をそばに置いてたゞずんでゐた。色の白い瘦形の、一見人好きのする顔で、學生服を着てゐる



ところは誰れにも苦學生であることが知られた。  
彼はすん／＼その男に心を吸はれてゐた。

『何處の學校？』

『××學校です。』

『親があつて？』

『いゝえ、だがかへつてない方が氣樂です。』

『おや／＼！』

そして頓狂に笑ふ二三人の聲がした。

秀夫はもごかしさうに直ぐと階下へ降りて行つた。でもはじめは非常に尊嚴にかまへて、若い八百屋を人づてに呼び入れやうとしたが、それも彼にはゆるされない程苛らくしてゐた。

『をい／＼。』

彼はいきなり臺所から首を出して怒鳴つた。

『お前は苦學生かい、そして親がないのだつて？』

けれどもその男はびつくりしたらしく、また反抗するやうな眼つきで凝つと秀夫を視た。彼はなんのこともだか譯がわからなかつた。彼はふと自分の輕卒な呼びかたが氣になつたりした。

女供は何時の間にか姿を消してゐた。よく見ると若い八百屋も籠に手をかけてゐる。

『お前は何故そんなにあわてるんだい？雨は降りさうもないよ。空を仰いで御覽、あんなに雲切れがしてゐるぢやアないか。』

『あなたは僕をひやかす氣なんですか？』と八百屋は言つた。

『お前は俺れが慈善家であることを知らないんだね。きつとさうだ。それで俺れに反抗する氣になつたんだね。しかし安心してよい。俺れは救世軍と兄弟



分だから……』

『馬鹿にしちやアいけません。』と再び八百屋は叫んだ。そして、ぶり／＼しながら逃げて行つた。

秀夫は張合ひのない、裏切られたときにでも感じる失望的な情にひたつてゐた。彼はもとの座に歸ると、室の隅から隅へ往つたり來たりした。彼は惱ましさうに雙手で頭を抱へてゐた。また折々立止つて、黄色な壁土や襖の金具をじつと視詰めてゐるが、その實彼は意識が不明瞭になつてゐた。

『ひらけない奴だ！』と彼は呟いた。その聲ですら自分のものでないやうな氣がした。

若い八百屋は二三日たつてから顔を出した。その時彼は丁寧に玄關から訪ねた。少しもわるびれないで、一切をのみこんでゐると云つたふうに振舞つてゐた。彼は案内されるまゝに、部屋々々のあまりに贅澤な飾りを今さらのやうに

驚いて眺めた。

彼は最後に洋室へ誘はれた。其處には秀夫が背を向けて佇んでゐた。注意すると、彼はこつ／＼壁を叩いてゐた。

彼は容易にお客を見やうとはしなかつた。もうすこし突きこんで考へると、八百屋を怒らせる手段か、或は彼自身に苦悶を感じてゐるかの二つであつた。しかし、秀夫が振返つて八百屋を見た時には頬笑んでゐた。

『俺れの意志がわかつたと見えるね？』

『あなたはまた那麽ことをおつしやるんですか！』

『俺れは慈善家だから。』と秀夫はきはめて眞面目に言つた。彼はどう言つたら好いかを先刻から考へてゐたやうでもあつた。

『もしお前が困窮してゐるのだつたら遠慮はいらないよ。家へ出る時には随分決心を確めてゐても、思ふ相手の前ではそれが臆して言へないものだ。那麽こ



とは俺れもたんと経験してゐるんだからね。』

『あなたは悲惨な境遇にある人をさがしてゐらつしやるんでせう。あなたの心を慰めるために、言はば慈善と云ふ旗を立てゝ。』

『俺れは神の使徒なんだ!』と秀夫は充分に力を入れて言つた。彼は興奮してからだが顫へてゐた。

『えゝ、さうですとも、あなたは慈善家ですよ。おや、あなたは怒つていらつしやいますね。だが、あなたは喜んで僕のお願ひを聞入れて下さるにちがひない。』

さう言つて若い八百屋は狡るさうな眸をかがやかした。彼は秀夫の胸底に流れてゐる秘密を悉くつかみ得たやうに考へた。

『あなたは人を救ふ資力を失つた時に、殆んど自殺もしかねない苦痛を感じるでせう。』

けれども其聲に秀夫は耳をかせなかつた。いくらか憎惡の念もきざしてゐたし、青二才の癖にと云ふ侮蔑の意識が加はつてゐた。

彼はしいて笑つて見せた。どうかすると、穴のあくほど八百屋の顔を凝つて視詰めてゐた。

二人はやゝ暫く黙りこんでゐた。お互に氣まづい思ひをして、でも折々約束したやうに瞳を會はせたりするが、すぐと反對の方向に視線をそらせて仕舞つた。

『僕はお願ひがあるんです。』と若い八百屋は眞剣になつて口を開いた。

『僕は慙ふしちア居られないんだ。家には友人が脚氣で苦しんでゐるし、僕は薬を取りに來たんです。そして明日の米代も工面しなければなりません。僕はあなたを見立てゝお願ひするんですが、その男は驚くほど聰明な青年で、矢張り苦學生です。ところで、あなたはきつと明日お訪ね下さるでせうね。』



しかし何處までも落付いた調子で、また、呑込んでゐるやうに八百屋は言つた。彼は住所を記してある名刺を一枚突出すやうにして、別に哀願の態でもなく、そのまゝさつさと歸つて行つた。

『馬鹿にしてヤアがる！』と秀夫は叫んだ。

彼はかつてこれ程無禮な依頼を聞いたことがなかつた。彼は八百屋が歸つた後、ぐつたりして安樂椅子に凭れた。そして凝つと考へなほして見ると、八百屋の言葉には多くの皮肉があつた。見えすいた輕蔑の色も浮かんでゐた。たゞへその調子が眞面目であつたにしても、秀夫の記憶には玩具にされた怨みと、くすぐられるやうなもどかしい憎みがあつた。

彼は足元に落ちてゐる名刺を視詰めてゐたが、さらに拾つてもう一度丁寧に讀んだ。

『明日訪ねて来いって！莫迦く〜しい。』

彼は名刺を引裂いて仕舞つた。手當り次第に物を投げつけたいやうな氣持ちになつて。

### 三

『明日訪ねて来いって！』

翌日も秀夫は怛ふ呟いた。彼はその言葉がさらに不愉快であつた。どうかすると、じはく己れの自由を押付けられるやうにも感じた。しかしそれはほんの暫くであつた。ただ若い八百屋の皮肉な聲を思ひだす時に限られてゐた。

彼は薄暗い部屋に長くなつてゐる病人を想像した。頬骨の高い蒼ざめた顔の男が苦しさうに寝返りを打つて、喘ぎながら、眼は吊上つて、首のあたりがひく〜動いてゐるのだ。彼は極度に惱まされてじづかに座つてはゐられなかつ



た。

『助けてやる、助けてやる！』

『俺れは神の使徒だから。』と彼はつけ加へて言つた。

秀夫はその男が泣いてゐるところを見た。

『あなたは恩人です、かけがへのない尊いお方です。私はあなたによつて生きることが出来ました。そして、あの意地の悪い皮肉屋の友人も遂にあなたの恩澤によつて成功しました。私達は如何にしてこの大恩に酬ひませうか、どうしたらあなたのお氣にめすかと云ふことに苦しんでゐます。』と感謝にむせんでゐるのだ。秀夫にはそれが單に幻影や想像の虚言であるとは信じられさうになかつた。彼は若者と面談してゐるやうな氣がした。

『助けてやるぞ！』

彼は幾度かくり返して心に叫んだ。

『嬉しさうに頬笑んでゐるぢやアないか。』と呟いた。

その日彼は遂に苦學生を訪ねた。が、彼等の住居に着くと、秀夫はあまり好い氣持ちはしなかつた。なんだか八百屋の計畧にかゝつたやうで、又うしろから八百屋がゲラ／＼笑つてゐるやうで、彼は始終惱みどうしに一步々々と進んで來た。

彼は振りかへつて見る事が度々あつた。考へると、彼自身でさへその行爲は一種の物好きに思はれた。

『馬鹿氣た話だ！』

そして刻一刻自己嫌惡を感じだすと、いつこく者の彼は俯向いたまゝ、引返して行く。

『もじ／＼。』と細い聲で呼止める者があつた。

『もう歸るんだ。』と彼の心は言つた。



『もし〜。』

『その手には乗らないよ。』

けれども秀夫はそつと振向いて視た。狭い路地がすつと長く續いて、その間には猫一匹も見られなかつた。恰度苦學生の部屋らしい軒にはぎだらけの白地が一枚つるしてあつたが、風さうけて、折々その裾が巻かれてゐた。秀夫は立止つて凝つと窓に視線をくばつた。氣のせいか、痛々しい病人が其處から覗きさうであつた。彼は直ぐに興奮して仕舞つた。彼はだん／＼その側に近寄つてゐた。

『此家に苦學生が住んでゐるんだ。』と彼はまた新に考へた。

彼は吸はれるやうに、と云つても矢張り病的なふるへかたをして軒をくぐつた。彼の眼には先づぼろ／＼の古疊がうつつた。

それから七八年も過ぎたつひ近頃の事であるが、秀夫には既に一文の蓄へど云ふものはなく、のみならず、久しい間の安逸から今一度勞働する勇氣もなかつた。従つて妻との口争ひは毎日さまつたやうに繰返された。彼はどうかすると妻の些細な言葉じりをとらへて、憎悪を感じたり怒つたりした。また、いよいよ自分でもたへられなくなると、眞赤になつて、額には疳癩線を浮かせて、われるやうな聲で恚ふ言つた。

『出て行け、出て行け、この業ざらし奴!』  
そして、

『こんな筈はない、まつたく甚い!』と怒鳴つた。

彼は以前興奮のあまり家を飛出したと同じく、胸を掻きむしられるやうに感じながらあてもなく走廻るのであつた。

しかし何時でも無報酬であつた。



「俺達の生きる道は何處にあるんだ。俺達はいつでも真面目に考へてゐるぢやアないか！」

彼の悩みはさらに高まらざるを得なかつた。

聞くところによれば、利口な細君はその後彼の不在中に、一切の家財道具を賣拂つて逐電したこの事である。

——完——

## 床屋の弟子

（大正八年一月作）



『支店を出すのも作さん一人がたよりだから、其處はあんたも呑込んで勢出して呉れんと困る。いづれその内には職人も殖やす考へだからね。』

その夜親方は弟子と酒を交はしながら、泌々恚ふ作さんにたのんでゐた。

『時の野郎なんか今に追出して仕舞ふ。』とも言つた。

翌日からは常さんまでが職場に立つやうになつて、ほんとに床屋の弟子らしい気分がやつと芽ざしい來た。作さんは一々手を取るやうに教へて呉れるし、源ちゃんの疳高い聲もなくなつて、今では全然自分の世界であるやうな喜びを感じた。



『常さんも可成り上手になつた。』と内儀は言つた。

『氣が置けないで君が一番好い。』などと書生ツボは囁した。

その頃彼はひどく誇張的な感情にひたつてゐた。彼はさらに、過去の記憶をまるで夢のやうに考へた。それはすべてが田舎臭い醜態で、今では赤面するやうな事實であつた。彼は何をいっても先づ都會生活から受ける満足を謳はずにはゐられなかつた。

『田舎にくすばつてゐる位ひ莫迦氣な話はない。』と親方に答へたことがあつた。

それは何かの拍子に親方が都會の感想を訊ねた折であつたが、その後も次第に都會化して行く自分の姿と言葉に限りない喜びを見出してゐた。

彼は田舎の親達へ知らせる手紙でも、都會に習熟しつゝある誇りと、内儀の親切なことをかならず書いて送つた。

秋になつてから仲間の周旋で利助と云ふ職人が殖えることになつた。もちろん本店が手不足なのでその方へ廻されたが、三十になつても妻のない彼は相變らずなまけ者で、時さんとは違つて酒にも随分強い方だつた。彼は女などを平氣で伴込んで騒いだ。彼は常さんをまるで自分の弟子のやうに考へてゐるらしかつた。そして、こんな時には凡て彼を小使扱ひにして、氣輕な性質がいかにも喜ばしさうであつた。

『利助などの使ひをするんちやア無い。』と内儀は苦面をつくつて折折注意してゐた。

常さんはけれども一向氣にしてはゐなかつた。彼はかへつて利助の言ひつけを面白いことに思つた。また、さうした男の遊興振りも見たかつたし、一面には彼の命令にそむいた時に起る腕力の豫想が苦しかつたりした。彼は隠れながらもつとめて利助の機嫌をさるやうに心掛けた。



職人としては作さんなどと比較にならない程で、親方もその手つきや刈方には見る度に感服してゐた。その爲か自分でも始終鼻にかけて、眞面目くさつた作さんの主人振りには余程以前から嫉妬を抱いてゐた。彼は常さんを利用して作さんを困らせた。

『なんだ手前たちが………』

どうかすると那麽あらくししい言葉を使つたりする。が、作さんにはそれが何んの影響も與へなかつた。

『無神経だな!』

さう言つて利助は苦々しさうに彼を視詰めた。氣の向かない時はどんなにお客がつかへてゐやうと平氣なもので、内儀のながい顔を見ながら葺の煙を輪にして嬉しがつてゐた。彼はまるで資本主のやうな狡い眼を見張つて、作さんや常さんが切りに動かす鉄の音や、道具の置換へにごた／＼する店の雑音を心地

よげに聞いてゐた。

しかし、そんな男は何時でも永くは續かなかつた。利助は給金の争ひから此處を出たのであるが、その後備はれた二三の職人も悉く喜多床に於ける命は短かつた。

『何うして職人が居付かないだらう?』と始めの内は親方も審しがつてゐた。

後になつて、親方は放埒と手前勝手が渡り者に普通であることを知つた。彼はそれが作さんの無頓着に根負けをするのだと悟つて滑稽にも考へられた。

『弟子に限る。』

『氣苦勞がないからね。』と内儀も答へた。

で、その後親方も決して職人を求めやうとはしなかつた。仲間から依頼されることがあつても「弟子なら」と常に職人だけはことわつてゐた。

『常さんも上手になつたし、作さんと兩人でゆつくりやつて貰ふのさ。』



『大丈夫ですとも、職人などが居るとかへつて面倒くさい。』と常さんは張りの好い聲ではげました。

『俺れが一人だつて大丈夫なんだ。』

心では眞面目に那麽ことも考へてゐた。

## 二

春になつて作さんと常さんは支店へ移ることに定まつた。これまでは内儀が始終本店にゐたので子守りの煩ひはあつたが、一方には色々な利益、時々的心使ひや、當然常さんのなすべき務めを手傳つて呉れたのに、此處へ越してからはそれがばつたり絶えて仕舞つた。彼はまつたく幸福の一部分をもぎ取られたやうな淋しさを感じてゐた。なほ、それよりも痛切な悲哀を覺えたのは内儀の

姿を見ないことであつた。本店に居る間はさして氣にもとめなかつた顔が此頃では幻影の如く眼先きに立つて、滅入るやうな沈黙が彼の周囲を取巻いたり、それとは反對ないらくした氣分がほとんど發作的に起つたりした。

『飯時にはあく程見るんだ!』

しかし、實際にのぞむと彼は何時でも俯向きがちであつた。彼は一度もはつきり内儀の顔を見ないで支店へ歸ることがあつた。

『莫迦に遠慮がるではないか。』と親方は不思議さうに彼の素振りを視詰めてゐた。

彼は態々事件を持出して本店へ歸つたりした。用もないのに本店でうろくしたり、果ては暇だから子守りをすると言つて終日支店へ歸らないこともあつた。その癖支店でも二人にはあまる程仕事があつた。だが作さんは決して不平を訴へなかつた。その爲めか彼は悪いことだとも考へず、親方も強いて咎めや



うごはしなかつた。

『もう歸るんですか？』

どきたま内儀が支店へ使ひに来てその足で歸らうとすれば、常さんは不機嫌な顔でその後姿を見送つたりした。

『話して行きなさいよ。』と彼は言つた。

本店では常さんのそつつかしい素振りが一時問題になつて、兎もすれば内儀から彼の噂に花を咲かせてゐた。が、親方や内儀には不可解なまゝの断片的な考察しか浮かばなかつた。ただ一人源ちゃんだけは知つた顔で色氣がついたんだと言つた。そして、始めのうちこそ親方夫婦に彼の判断が莫迦らしく思へたものゝ、何時とはなしにその説が採用されることになつた。

『もう十七になつたんだからね。』と親方はもつともらしい口調で話した。

内儀が常さんを見ると頬笑むやうになつたのもその頃で、年増女からこの若

い初心者がいかに滑稽に見られたかは想像にあまりあることだ。

『お前は何かしたんだよ近頃、狐でもついてるんぢやアないかい！』

けれども常さんは満足してゐた。彼は内儀の顔を見ただけで充分な喜びを感じた。彼は他の如何なる感覺にも疎雑な意識さへ起さず、内儀と向ひあつた時はじやぎ方も一通りではなかつた。動悸は高く胸を打つし、呼吸も忙しくなつた。しかし、暫くすると意外に常さんの口は重くなつて、眸も決して内儀の顔には注がれなかつた。

花時になつて常さんの父が上京したので、さつそく彼には一週間の休暇が與へられた。親方も父とは幼馴染だけに何かと親切をつくしてあしらつた。そして、態々廣島在から出て來た珍客の意を感めるため、常さんの上達やおとなしい事をこま／＼と話して聞かせた。

『もう一人前の職人です。』



親方から真面目にかう言はれて見ると、父の眼にうつる常さんは何處もなく賢さうであつた。田舎を出た時とは姿も余程みやびやかになつて、言葉も全然江戸ツ子と思はれるまでに變つてゐた。漢語も折々ませて使ふとか、田舎者の父にはまるで判断のつかない言ひまわしをしたり、二年間にかうも變るかど怪しまれる程見聞も廣くなつて、故郷の村長や教員にも劣らないだらうと父の誇りを起させるだけ相當な智識もあつた。

『お兼が聞いたらさぞ喜ぶだらう。』と父はしみじみ常さんに言つた。

彼は面のあたり父からほめられることがなによりも嬉しかつた。彼は己れの都會化して行く満足を心に繰返して叫んだ。

彼はさらに單調な因襲強い故郷の生活をさかんに攻撃した。そして、眞に天分を發揮しやうと思へば都會に限るのだと言つた。

『學校の成績なんかあてにならんね。』

彼はひとかどの成功でもしたやうに、父から友人の話を聞く時には心好い笑ひをむさぼつてゐた。

『同じ床屋だと云つても、東京の職人は腕が違ひます。』と常さんは言つた。

喜多床では終日愉快にくらす豫定で、飛鳥山へ出掛けた。お定と云ふ三味線の巧みな婆さんや、親方の最負にする小若姉さんも一行であつた。源ちゃんや常さんはもちろん、假裝好きな四邊の若衆も二三名くわはつてゐたが、ただ一人作さんだけは留守居を望んだ。

『相變らずだね。』と若衆は聲高に笑つた。

『だいぶ變つとりますね?』

常さんの父も途々そんなことを親方に話した。

その翌日は向島から淺草を廻つて吉原へ這入るつもりで、おひる過ぎに家を出た二人は幸ひ淺草で夕暮れ時にあつた。仲店には眩しい電燈に描きだされた



風變りの品が色々配列されてゐた。そして、軒のならばも非常に短く、すべてが奥の見えすいた狭い店ではあつたが、一年に一度開かれる田舎の市が父の頭にぼんやりと浮んで来た。

さらに公園を横切つて常設館前に出ると、後から後から押し込まれるやうな人の流れが道一杯につづいてゐた。父は少からず驚いた様子で、ほんの一時ではあつたが、まつたく失神者のやうに立止つてゐた。彼は足元に注意しながら両側の旗や幟を不思議さうに眺めた。太鼓や拍子木やピアノの音が別な世界から聞えて来るやうに感じた。

『今日は何事があるんなら？』

『何時でもこの通りですよ。』と常さんは言つた。

彼は少してれ氣味になつてゐた。余りによぼ／＼した父の姿や、側につき添ふてゐるのにきまりの悪い程立ちどまつて店を覗くとか、田舎丸出しの言葉を

遠慮なく人前で使はれるのが嫌だつた。そんな時には彼等の狭い見聞から来る滑稽を笑ふよりも、父と自分を見くらべる往來の人の心を察する時に起る不快

——自尊心を傷つけられた憤りが先に立つた。

『さあ／＼、うる／＼しないで……』と常さんは呟いた。

『見つともないぢやアないか。』

父には常さんの心持ちがよく解つてゐた。しかし、何事をも丁寧に説明して呉れる優しい一人息子にはけつして悪意を挿まなかつた。

『おれが十二階ですよ、中には賣店もならんでゐるし、カフェーもある。』

『これが花屋敷で充分半日くらひは遊べる。』

その聲にはあきらかに自分の領分であると云つた風の誇りが讀まれた。遊廓を歩くときでも、列をつくつた女郎の打掛け姿をおぼろげながら胸にうかべてその時のひやかしがごんなに面白かつたかを空想まじりに聞かせた。そして



今では樓主の収入が減つたであらうと云ふこと、見物人にも意外に淋しい思ひをさせることなどをこま／＼と意得さうに話した。

帝劇へも一度は行くし、市内のあらゆる名高い箇所はもろさず連れて歩いたその度に父は驚異の眼で迎へてゐた。常さんはそれが言ひ知れず愉快でもあり、享樂の多い己れの満足をことさらに強めた。

『なんと云つても都會ですよ、都會に住んでゐる者は智識の程度からして違ふからね。』と常さんは父の見送りに東京驛へ來た時にも言つた。

『歸つて見たけりやア一緒に行かう。』

『嫌ですよ田舎は……お母さんにも來てもらつて下さい。』と常さんは答へた。

三

「一筆申しあげ候。先頃はお父さんの長逗留にいろ／＼とお手数を煩はし、なほ、歸る節はお土産など澤山にいただき一同の者大騒ぎで喜び居り候……」と云ふ風な書出しの手紙がその後常さんにとどいた。彼はひと通り讀み終ると蔑んだ笑方をして仰向いてゐたが、それでも何かしら氣になつて再び中頭を手にした。

「…………お前さんもなか／＼利口におなりだと云ふ話をお父さんから聞きおよび候。一人前の職人にもなり、帝都のこと悉くひと通りは御存知の様子、私はそれをきいて今迄の心配が一掃されたやうな心安さを覺え候。またごんなに喜びが私の胸に詰めよせたことかを御推察下されたく候。しかし、世の中には、まゝあることにて、お前さんの友達である田中の息子も大坂にて憎落いたし候とかく都會は周圍の華美が人を迷はせるとのこと、お前さんに限つては那歴



こののあらう筈もなく、あつてはなほさら近所への面目もこれなく……』とあつた。

『何處から?』と内儀は覗くやうにした。

『この通りだから困つちまう!』

常さんは母の手紙を投出しながら、

『くだらないことに氣を揉んでる。』と吐出すやうに言つた。

情落とは何を意味するのか彼にはわからなかつた。彼の見る都會には杞憂すべき何者もなく、其處には人生の向上と安全な文化とを宿してゐた。また、神のやうに尊い一切の抱擁刀のあることを感じた。もつと直接な例をとつて言へば、自分が田舎人に賢く見える所以や、彼等に誇り得る心の満足を意識するにいたつた動機、それは悉く都會生活から來てゐると常さんは考へた。彼は都會を批難する聲がききたくなかつた。彼は都會病の恐ろしさをかこつ者に出會ひ

たくなかつた。

『無智な者は云ふことが變つてゐますね。』と彼はつけ加へて言つた。彼は裏切られたやうな憤怒を感じながら。

内儀はその時始めて常さんが都會の嵩拜者であることを知つた。で、慙ふした男はやゝもすれば都會病にかゝりやすく、自分では意識しない内に恐ろしい耽溺の淵にまきこまれて行くのだと知つて、手紙に書かれた母親の配慮も充分うなづかれた。

内儀はふと一高の學生であつた従弟を思ひ出してゐた。その男は喜多床へも以前は始終顔出しをしてゐた。それがまた極端な都會崇拜者であることを自分でも誇つてゐた。實家はかなりな資産家だけに學資もゆたかであつた。或はその事が耽溺におちいらしめた大きな原因をなしてゐるには相違ないが、彼は來るたびに西洋の風俗や習慣を上手にたゞへてゐた。



「部屋に鏡がいくつもあつて、不精者でも顔や姿に無頓着でゐられない。」  
 そんなことを云ふ彼は事實綺麗好きであつた。髪も丁寧に真中から分けてゐるし、襟元からは高價な香りが絶えずあたりをただよつてゐた。

彼はまた常に都會の讚美を忘れなかつた。それはおもに享樂機關の多いこと、智識や趣味が一般に高尚であると云ふ点についてであつた。

「都會に生活するおかげですね。」と従弟は口癖のやうに言つてゐた。

歌舞伎では燕若、新派では喜多村、講談では小金井が第一に最負であつた。その外種々の娛樂にも相當な智識を持つてゐた。そして、これ等の通よばはりをするのが最も彼の誇りとするところで、かつこり性であつた。彼はつづいて廓通ひを覺えた。藝者買ひも始めた。

その頃彼の頭にはいつでも華やかな夜の街が去らないでゐた。彼は同志を集めて飲酒會を開いたりした。

『好ちやんのところへ連れて行かうか。』

彼はけつして悔悟も慙愧も感じてはゐなかつた。

喜多床へ來なくなつたのは彼の放埒がやつと親に感付かれた頃で、實家からも二三度問合せがあつた。後になつて聞いたところによると、學資の絶えた後はある會社にしばらく勤めてゐたが、相變らず無智な享樂がわざはひして自分から退職せねばならなかつた。最後に、ある酒場の女と關係したのが始まりで彼は到々悪智慧を働かせるやうになつたとの話だ。

内儀は新聞で讀んだ彼の事が今あたらしく思ひ出された。

『惰落せんやうに注意するんだね。』と内儀はつくづく常さんの眼のところを視詰めた。

常さんは常さんで別なことを考へてゐた。

何故そんなことを内儀は言ふのだらう。自分の誇りを裏切るやうな文句がど



うして母には平氣で書かれたらう。しかも教訓らしい口調まで使つてゐる。その心持ちは文化を呪ふ劣敗者の負惜しみでなくて何であらう。上達と向上と見聞の擴張、それらが惰落に見える彼等の言葉は、よし愛と誠意がこもつてゐるにせよ、人生を深く廣く辿らうとする者にはなんの價値もない話だ。彼には享樂の數をかさねることや、女や酒を知ることなどもけつして惰落と呼ぶべきでないと思つた。彼はむしろそれらを向上の第一歩としてうなづいた。

「なにが惰落で、なにが罪惡なんだ。」と彼は言つた。

ある日のこと、それは雨降り揚句で道の悪い午後であつた。彼は親方の代理で芝へ出掛けやうとして三田行の電車に乗つてゐた。車室はかなりな人込みで、しかし春日町で乗換への者が降りてからはやつとおちつきを感じた。彼はいつものやうにまづ一通りお客を眺めた。彼の直ぐ前には結ひたてらしい高島

田の女が座つてゐた。その膝に置いた血色の好い手首はすきとほるやうで、さび／＼してゐた。常さんは電氣にでも觸れたやうに、また突然脅迫されたやうに、ほんの一時、彼は妙な感情に打たれた。ぐつと何者かが咽喉までつかへたやうに感じた。彼は唾を呑込んで仕舞つた。それからはその女を正面から見る事が出来ないで、釣皮をづらして脱れるやうに體を引いてゐた。

車が動き出したときにふと常さんは女の視線に出會つた。彼はにはかに眸を外らさうとしたが、それが湯屋の娘であることに氣づく、そして女が丁寧に黙禮するのを見て、彼はどぎまぎしながら頭をかがめた。今の今まで知らない女として、けれども彼の心からは消すことの出来ない女として眺めたものが、たちまち知人に變つた喜びは明らかに顔から讀まれた。また同時に、その女から受けた深い印象と云ふやうなものが次第にぼんやりして來た。

日頃も眼の輪廓がはつきりしてゐるところに魅力を感じたことは事實であつ



だが、今日ほど神秘的な刺戟を常さんはその娘から受けやうとは思はなかつた。常さんはかの女が小川町で降りるまでしみじみその姿に見惚れてゐた。そして、娘が席をえしやくを残して去つたのちに、彼も其處でふいと降りる氣になつた。

芝から歸ると常さんはさつそく錢湯へ出掛けて行つた。何時もは番臺にゐる筈の娘は見えなかつた。そのかはり母親がひかへてゐた。かの女の骨張つた顔や、狡さうな眸はことさらに不愉快であつた。彼はその足で歸らうかどさへ思つた。しかし一縷の期待が——今に歸つ来る。さうすればきつと番臺に現れるだらうと云ふ望みが芽ざして、それでも何者かを搜索するやうにきよとくしながらやつと洗場に這入つた。

中には白い湯氣が一杯にひろがつて、労働者らしい男の筋肉がひよい／＼浮かんでゐた。常さんはもうぐつたりしてゐた。彼は身動き一つしないで凝つと

屋根裏を仰いだ。右の方では洗場の音がひどく滅入るやうに聞えて、その間々に人聲が夢のやうに響いた。彼は絶えず番臺に視線をむけてゐたが、やゝもすると、疲労と腹立たしさを感じた。

常さんがいら／＼した氣分で支店へ歸つたのは十時過ぎで、其處にはめづらしく内儀が來合せてゐた。作さんは居なかつたし、店の土間も棚も住みなれた處とは思へないほどがらんとしてゐた。

内儀は常さんの近寄つて來るのを頬笑みながら視詰めて、口元には今にも話しかけやうとするうごめきがあつた。少し上氣した常さんの顔には肉感的な愛らしさと、今迄味つたことのない或物が強く浮かんでゐるやうに感じられた。

『随分お湯がながいね。』と内儀は言つた。

常さんはふさぎこんだまゝ、それでも何處かにおちつきのない表情で座敷に上つた。内儀は彼の面にやるせない苦悶を見た。そして、自分のくはだてや期



待がつつかり臺なしになつたやうな淋しさを感じた。

『なんと云ふ莫迦氣な真似だ!』と常さんは呟いた。

『あの婆の奴が氣にくはねえ。』

彼はまた暫くして、

『あいつ何處へ行つたんだらう!ほんとに。』と叫ぶやうに言つた。

すると内儀の胸には「惚れたんだな」と直覺的な判断がわいて、からかつて見たいいたづらな氣分がじはくかの女の意識を占領した。眼もとには何時の間にか濃艶な笑ひがうかんでゐた。

『常さんとお高さんなら似合ひの夫婦だらう。』

さう言はれて常さんはやつと氣がついた。側には悉く自分の心を讀んでゐるらしい内儀が居るのだ。肩には濡れた手拭がかゝつてゐる。彼はうかつてあつた己れが急に醜いものに思はれた。

四

内儀は彼のはにかんだ顔を覗いて得意さうに笑つた。

『とりもつてあげやうか?』

常さんの頬は眞赤に燃えて、ただかの女の好きなひやかしの前に屈從する外はないやうに、しかし、相手にするのが莫迦らしい氣にもなつて煙管をくはへた。内儀にはそれが白々しい滑稽に見えたり、うぶな戀の發現であるやうにも感じられた。

『惚れたんでせう?常さん。』と内儀は彼の背中を打つて喜んだ。

『那麼こそこちやアないんです。今日電車でもよつと見かけたから……………』

『矢張りとりもつてほしさうだね。』



『……………』

彼はふいと茶化してみたくなつた。さうすればかの女のからかひを少しでも防がれるだらう。そして、今迄とは反對に内儀のにかい顔がごんなに面白く見られるだらうと云ふ豫覺があつた。

彼は一應あたりを見廻した後「ほんごに惚れたんです」と言つた。

『さうでせう。私のにらんだ眼にまちがひつこなからだから……………』

『しかしお高さんちやアありませんよ。』と常さんは頬笑んでゐた。

『内儀さんに惚れたんです。』

『嫌な子！』と内儀は眉をひそめた。

『嘘ちやアない。』

さう言つて常さんは案外平氣であつた。むしろ遊戯的な愉快がともなつて、媚をふくんだ眸を内儀の眼に送つたりした。彼はかの女の表情がごんなに變る

かを楽しんでゐた。そして、仰向きながら、折々後目に見のこを忘れなかつた。

内儀には彼の計畫が充分に了解されてゐた。しかし、彼の言葉か妙に頭の底へこびりついて、常さんの聲がいつわりであるとは信じられなかつた。媚びをうかべるところはほんごに自分の愛をもとめてゐる様でもあつた。

『大笑ひをさすわね。』と内儀は言つた。

『こんな婆さんよりは若い娘が好いでせう。』

『若い奴は大嫌ひ！』

『何うだかね？』

しかし内儀はなんの雜作もなく彼の心に引きづられてゐた。いたづらな氣分はますます起つて来るし、常さんの若々しい肉體美も刻々かの女の胸に喰入るのが感せられた。かの女は親方の錆びや頰癢につままれた薄ぎたない皮膚と比



較したりした。かの女は常さんの愛らしい姿を思ふさま抱きすくめたいやうな興奮を感じてゐた。

夜は物じづかにふけて、帳場にある目醒時計はもの憂さうに秒をきざんでゐた。折々通りからは酔漢の鼻唄や自動車の警笛が聞えて来る。しかし同團には人聲がばつたり絶えて、眠つた街の姿が内儀には明瞭にうなづかれた。

かの女は親方や作さんが今夜歸らない理由を知つてゐた。源ちゃんは何處へ行つたらう。もし彼が歸つた時に自分の居ないことが知れて問題にされはしないか、自分の娘は朝まで目醒めるうれひはない、と云ふことなどがごまごまと頭に展開されてゐた。

常さんは態々狡るさうな様子をして、内儀の膝に頭をのせたり、また腹這ひになつて、角刈りにした頭でこつくと疊を打つたりした。

その翌日になつて、内儀は常さんをつれて寄席へ行くと言ひだした。もちろん子供の守役ではあつたが常さんは欲しなかつた。恐ろしい或る疑惑も考へない譯にはいかず、内儀につきまとはれることが一種の不快をみちびくやうに思はれた。彼はやはり湯屋の娘を忘れることが出来ないでゐた。自分の思ひなしか、先方でも充分わが意をささつてゐるやうで、ともすれば電車に乗合せた時の黙禮が常さんを喜ばすのであつた。

彼は毎日銭湯へ行つた。それが怪しいと云つて源ちゃんは迂散な眼を光らせた。親方も笑つた。しかし内儀は不機嫌な表情で、人の居ないときは折々彼の膝を思切りつめつたりした。やゝもすれば常さんは嫉妬ぶかい内儀の視線に出會つてぞつとした。彼は永久に逃がすまいとする努力をあきらかに内儀の顔から讀んだ。

『そんなにお高さんが見たい?』とかの女は叫ぶやうに言つた。



『うわ氣を出すにも程があるよ。』

その度に、常さんは今迄のみにくい屈從がそら恐ろしく思はれた。彼は滅入るやうな沈黙と、やるせない腹立たしさを感じた。

お盆過ぎになつて喜多床には重大な事件が起つた。それは作さんが養子に行く話から出發してゐるので、親方も十二分に手をつくして引止めやうとした。現在でも手不足を感じてゐるやさきに、もちろん支店の主任者である彼の進退は喜多床の生命にゆゝしき關係があつた。しかし、日頃幽鬱な作さんにも似付かない強固な意志を見た時に、親方はその自由に何等の拘束も加へることが出来なかつた。ただ養子の可否について述べたり、先方の家がどんなものかを聞かせ、今後とてもこれにまさる家をきつと周旋すると親方はつけ加へて言つた。けれども、自分の利害ばかりを考へてゐるやうに取られるのも嫌であつた。作さんが養子になると云ふ家の主人は親方の知人で、折々喜多床へも出入り

をする本郷の床屋であつた。それが親方には一層不満でありむつととする所以でもあつた。その男は作さんが暇を願ふ前にはこきりに支店を訪ねてゐた。今から考へると誘惑の手段が講じられつゝあつたに相違ないとして、作さんの妙にそわ／＼した態がその時氣づけなかつたのを親方は残念に思つた。

『あの男はなか／＼口がうまいよ。』  
いくたびか親方はさう言つて作さんの顔を覗いた。

『作さんを養子にすると云ふのがをかしいぢやアないか、たしか六才になる男がある筈だ。』

『それは里へ歸したと云ひますがね。』と作さんはやゝ不安さうに答へた。

しかし、彼の頭には主人としての未來や、わが物とする剃刀のあたゝかい感じを想像して喜んでゐた。

『自分の店でなくつちやア張合ひがない。』と作さんは呟いた。



彼が出て行つたのちは暫く親方も途方に迷つた。彼はまつたく支店を片づけやうとしたが、内儀は出来ることなら維持したいと願つてゐた。それは支店へ往復する楽しさが忘れかねた故でもあるが、せつかく擴張した店をつぶすことは世間態が悪いと言つた。

正直に云ふと、親方も支店には充分な執着があつた。彼はその崩潰を見ねばならぬ運命がどんなに呪はしいものであるか、生きながら埋れて行く老の身がどんなに傷ましい響をもつてゐるかを感じた。

彼にはながい間沈黙と不愉快な日が続いた。

『心配には及びませんよ。』

『あつさり支店を畳んで仕舞をふ。』

『それちやア話にならん。』と常さんは言つた。

彼は作さんを離れては自存の出来ない親方の醜さを笑ひたかつた。意氣地の

ない親方の手段も齒痒さうであつた。かつ、己れを疎外してゐる親方の心が非常に不満足で、當惑した彼の様子には一種復讐されたやうな心好さも感じられた。

『俺れに支店をまかせて見ろ、さうすればきつとよい成績をあげてやるんだ。作さんが何んだらう！喜多床の生命はむしろ俺れにかゝる問題ちやアないか。』と常さんは思つた。

『どうしても支店を片付けるんですか、すいぶん莫迦氣な話ですね。一つ私にまかせて見る氣はありませんかい。きつと親方に安心させますよ。』

『さうだなア！』と親方は呟いてゐた。

『生意氣を言つてら！』と側からは源ちやんが口をはさんだ。

『いつたい親方の考へはごつちなんだね？』

『別に支店を畳みたいとは思つてゐないさ。だが續いてやれるかな。』



『そんなことは後の問題でさア!』

さう言つて親方の心が讀めたやうに源ちゃんは頬笑んでゐた。

實際親方も己れの見エ坊には勝てなかつた。彼は始めのうちこそ支店の維持には憂慮するし、作さんの仕打ちにもはなはだしい憎悪を感じてゐた。そして自分ながら不思議なくらゐるもの淋しい氣分に襲はれたりしたものの、後にはただ支店を片づけることばかり口癖のやうに言つてゐた。常さんにはそれが意氣地なしに見えて腹立たしくもなつたが、親方の言葉にはなにかしら裏書きがあるやうに源ちゃんも考へた。

けつきよくは其儘に支店を持続する相談がまとまつて、經營の都合から當分は親方が支店をあづかると言つた。

『どうして俺れに支店をまかせないんだらう!』

『もう此處へ來てから何年になると思ひます。好い加減に支店の一つくらゐあ

づかりたいね。』

常さんは絶えずつけ／＼内儀の前で言つた。

## 五

茨城在から弟子を入れた月に源ちゃんも下谷の方へ移つた。かうなるご勿論本店の責任は常さんにあるので、彼はそれがいかにも重大なものに感じられて來た。と同時に、喜多床に於ける自分の地位も考へだして、とつせん己れが尊いものに思はれたり、ます／＼前途は遼遠であるやうな誇りも起つた。言ふまでもなく親たちへは詳しい近況を書いて、安心をもとめる以上に誇張した自分の偉大さを知らせてゐた。



彼は親切らしく、その實は兄哥としての威權をたもつ手段として、新人の弟子に喜多床の習慣や掟を虐構まじりに教へた。彼はまた心にもない愛情を見せて、剃刀のさざ方から鋏の持ちやうまでこまかく説明したり、いかに己れが熟練してゐるかを得意さうに示した。

常さんにはさらに今度の弟子が自分より年長であることが心好い原因でもあつた。

彼は何事にも知つた顔がしたかうた。職務以外の事柄さへ不案内であること自白するに忍びなかつた。彼はそれを大きな耻辱のやうに思ひ、誇りを裏切る苦痛とも考へた。まして新入の弟子から聞く女の話などはよほど以前に實行したことこのやうにあしらつてゐた。彼はそして、出来るだけの努力で見聞をひろめやうとした。

『さうだ、俺れも経験したことがある。』と常さんは直ぐに頷いた。

近頃の常さんには余程おちつきが見られるやうになつた。錢湯へ行くにもきはめて人の注意を避けやうとし、内儀のからかひにも以前ほど神経をなやまさなかつた。彼はしいてさうしなければ弟子に輕蔑せられる恐れも考へたに相違ないが、他の原因は彼の戀が煩悶期に這入つてゐたからでもあつた。

常さんの胸には絶えず毒々しい暗雲がただよつてゐた。初戀の女を手に入れやうとするもだへも激しく、雜作はないやうでしかも失望と耻辱を豫想せねばならぬ口説きがさらに痛々しい響きであつた。

『どうしたらお高さんをひきつけることが出来るか、自分の容貌と喜多床の主權では足りないのか、其處にはほまれや美貌がいにごんな魅力を要するのだろうか?』

そんなことも常さんは眞面目に考へた。しかし、かの女の前にはごんな犠牲をもはらふ覺悟でゐながら、第三者に卑屈な場面を見せることだけはいやであ



つた。

彼は始終高くこまつてゐたかつた。そして、あくまでも應揚な氣分と利己的な高まんが去らないで、身内には情熱が刻々に狂潮を加へて行く、若い悲哀や深刻な悶へも起つた。人には語れない肉の欲求があつた。それでも己れを人前に傷つけて此等の満足を得やうとは思はないで、彼は次第に幽鬱な、次第になやましい感情をいだくやうになつた。

月の十七日は喜多床の休日であつた。その度に常さんはかならず淺草へ出掛けるのが習慣のやうになつてゐた。この節では内儀までが心配するほど顔の色も悪く、なにかしら自分でも物足りない淋しさを感じるこゝろがあつた。そんな時には繁華な淺草が彼の頭にのぼつてゐた。親方夫婦も氣晴らしに行けと言つたし、常さんも人込みにはいれば鬱陶しい氣分がちるやうに思つた。しかし一面には弟子を連れて歩くのが彼には一種の誇りで、壽司や天麩羅の名高い店々

を教へながらあさることあつた。活動役者の顔も奇妙によく覺えて、そんなことには無智な弟子から羨望されるところに快感を叫んだ。

彼は吉原や洲崎をひやかし半分に巡つたりした。折々はふとお高さんを思ひだして、そのきびくした肉の幻影を追ふやうに弟子と一緒に登樓する夜もあつた。その時でさへ常さんはしいて案内顔に振舞つてゐた。彼は都會化のうすい弟子の醜さを輕蔑したり、自分ながら己れが如何に偉大であるかを考へ、この上は何等の要求ももたないと云ふ風な喜びを感じた。

これよりさき、彼は内儀に小使ひをねだつたりした。その都度内儀は苦い表情になつた。かの女はしかし内心ではひどく氣持ちよく感じた。そして、あまり理由をたださうとはしないで絶えず要求通りの金を渡した。常さんは其處にも自分の幸福を見た。彼は次第に感謝と好意を内儀にささげるやうになつたが、たくみなをのれの手腕にもうぬぼれがあつた。



新入の弟子は常さんの無限な財力をいぶかつたり、煽動して彼の恩恵にあづかつたりした。それでも常さんの受ける感じはすこしも變らなかつた。彼はむしろ圖にのつて弟子を料理屋などへ案内してゐた。

『新内節の一つくらゐ知つてるだらう？』

『いゝえ。』

『そんなことぢやア仕様がなね。暇の時にすこし稽古すると好い……………』

さう言ふわが聲のうちにも兄弟子らしい心好さを常さんは味つてゐた。折々は弟子の言葉に皮肉な煽動をみとめながら、なせか彼には反抗心が起らなかつた。人の好い金持であるやうに自分でも思つた。

『たかが田舎者ぢやないか。』

彼はさうした侮蔑の感情にひたつてゐた。どうかするとそれが勝手な判断をくだして、自身では其處に大きな矛盾のあることに氣づかなかつた。

ある日常さんは白山上で作さんと出會つた。それは唐風のはげしい初冬の三時すぎであつた。どんよりした雲間からは絶えず身を切るやうな寒さがせまつて、街道には何處となく師走氣分がただよつてゐた。角の本屋に雑誌棚をのぞいた學生が二三人と、足ばやに過ぎて行く外套の男がちらほら見られた。

『作さんちやアないかね！』と常さんは懐しさうに頬笑んだ。

『相變らず元氣ですか？』

『久振りだね。』と作さんは言つた。

『どうです近頃の景氣は！』

彼はつくづく友の姿を視守つてゐた。この寒空に帽子もかぶらない袷一枚のみすばらしい男、それは以前喜多床の中堅であつた作さんなのだ。伏目になつて耻ぢた素振りがあはれにもなつた。彼は意外な感にうたれると共に作さんの身上に好奇心が働いて、すでに行はれた重大な變化を想像したり、友のつづけ



てゐる今の生活がごんごんにみじめであるかを知らうとする努力があつた。

彼は側の洋食店へ作さんを案内すると言つた。其處でくはしい近況も聞きたかつたし、少くとも作さんと比較するとき起つた己れの幸福を祝ふつもりであつた。

椅子につくと常さんは應揚にかまへてゐた。そして、不幸な友から一切の事情を聞きたださうとしたが、作さんは自分の境遇に關してはあまり多くを語らなかつた。ただ養家を出たことについて簡単な説明をし、今は流浪の身であるどつけ加へて言つた。

「親方はたつしやだらうね。」と作さんは言つた。

彼は感激したやうに天井を仰いでゐた。

「意氣地のない野郎だ！」

常さんは友に別れてからかう叫んだ。彼の眼には作さんのやるせない悔恨の

姿をうかべてゐた。彼はまた、作さんの淺慕な分別がいかにもだらしなく考へられた。

彼は家に歸るときつそくこの話を一同の前にひろげた。そして、彼は得意さうに己れの批評までつけくはへた。親方も内儀もかわいさうだと言つた。彼は毒々しい聲根で、その無智とやつれ姿を罵つたりした。

彼のあざけりたい心持ちは作さんだけにどまらなかつた。社會のあらゆる人が常さんの眼には小さく見られ、手腕や才能にとぼしい癡人のやうに考へられた。彼は自分の偉大さを充分信ずることが出来た。自由と云ひ權勢と云ひ、それ等はすべて己れに天の授けたものだと思つた。彼は始終横柄な解釋を與へてゐた。好い氣になつて輕蔑の眼を送つた。彼はこんなことがあつても我をまげやうとはしなかつた。屈することはないと考へた。

「俺れは偉大な人間だから！」



そして彼の怠惰は此處から始まつて來た。

『なんと云ふづうくしい野郎だ。』と親方は言つた。

『奴の増長にも困る。』

だが、彼を解備するについては色々な障害があつた。と云ふのは、たちまち支店の處置にくるしむことも知つてゐたし、廣島在の友人には義理をかがねばならなかつた。さらに彼の流浪姿が親方にははつきり想像されて、なさけ深い心にもう一杯涙をたゝへたりした。

『作さんでさへあの通りぢやアないか!』

『出来るだけ我慢してやるのさ。』と親方は呟いた。まつたく堪へられないと云つた風の表情で。

けれども親方はこんなことも言つた。

『背に腹はかへられんからね。』

親方はいくたびか見切りをつけてゐながら、常さんを解備するにはながい間の思案を要したのが事實で、いかに自分が決断にとぼしい男であるかを充分知ることが出來た。彼は己れに反抗するやうな態度で結着をいそいだ。

『悪く思つちやいけないよ、支店を疊む考へだから牛込の方へ周旋するんだ。』

『何處だつて食へらア! あつさり牛込の方はことはつてもらひませう。』と常さんは言つた。

『勝手にしろ!』

親方はすつかり絶望してゐた。



大正九年四月三十日印刷  
大正九年五月三日發行

(定價金壹圓)

お 師 匠 さ ま

著作兼  
發行者  
東京市小石川區初音町四番地  
鎧 坂 虎 嘯

印刷者  
東京市神田區東松下町五十二番地  
大 島 敏 郎

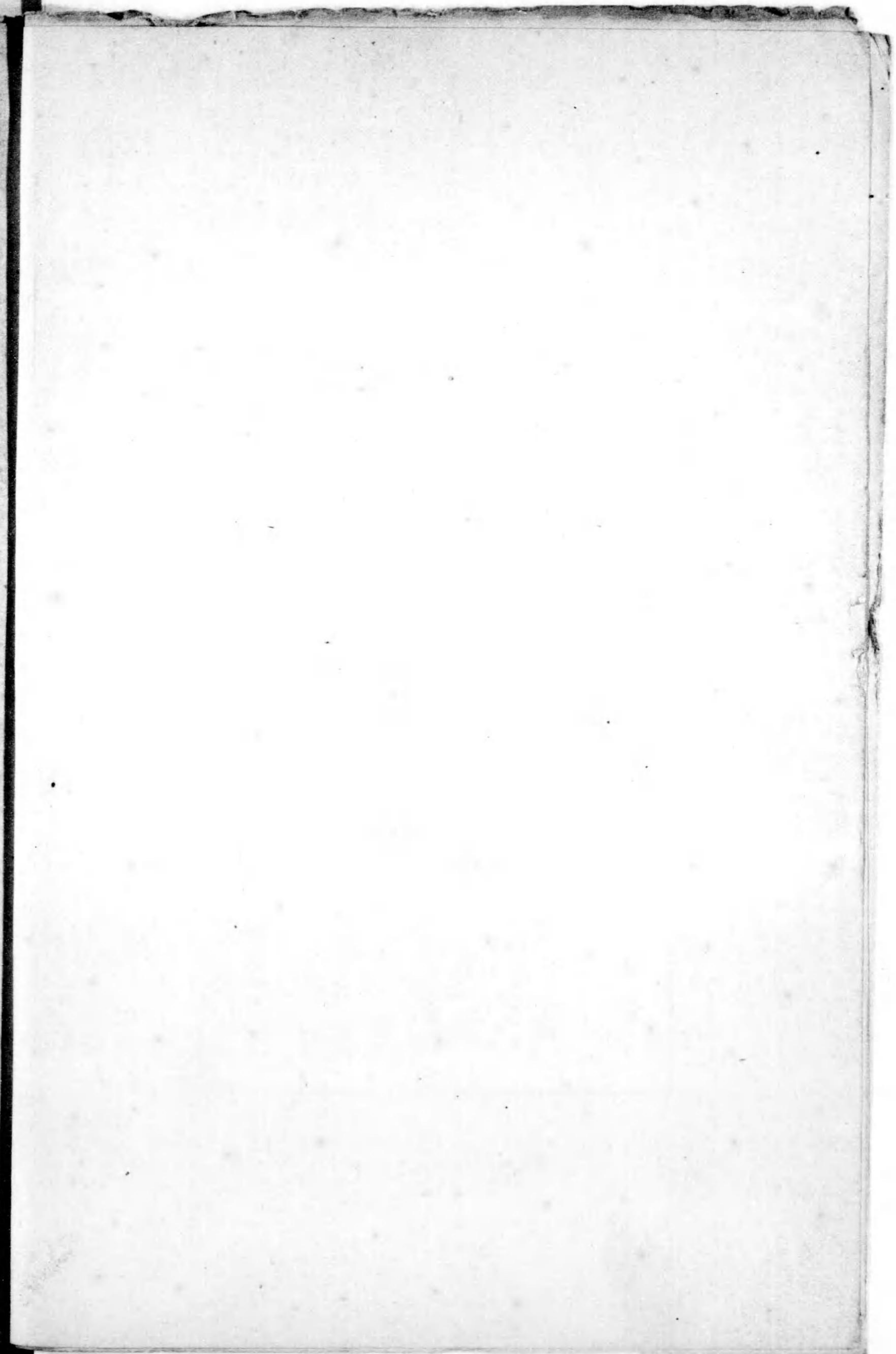
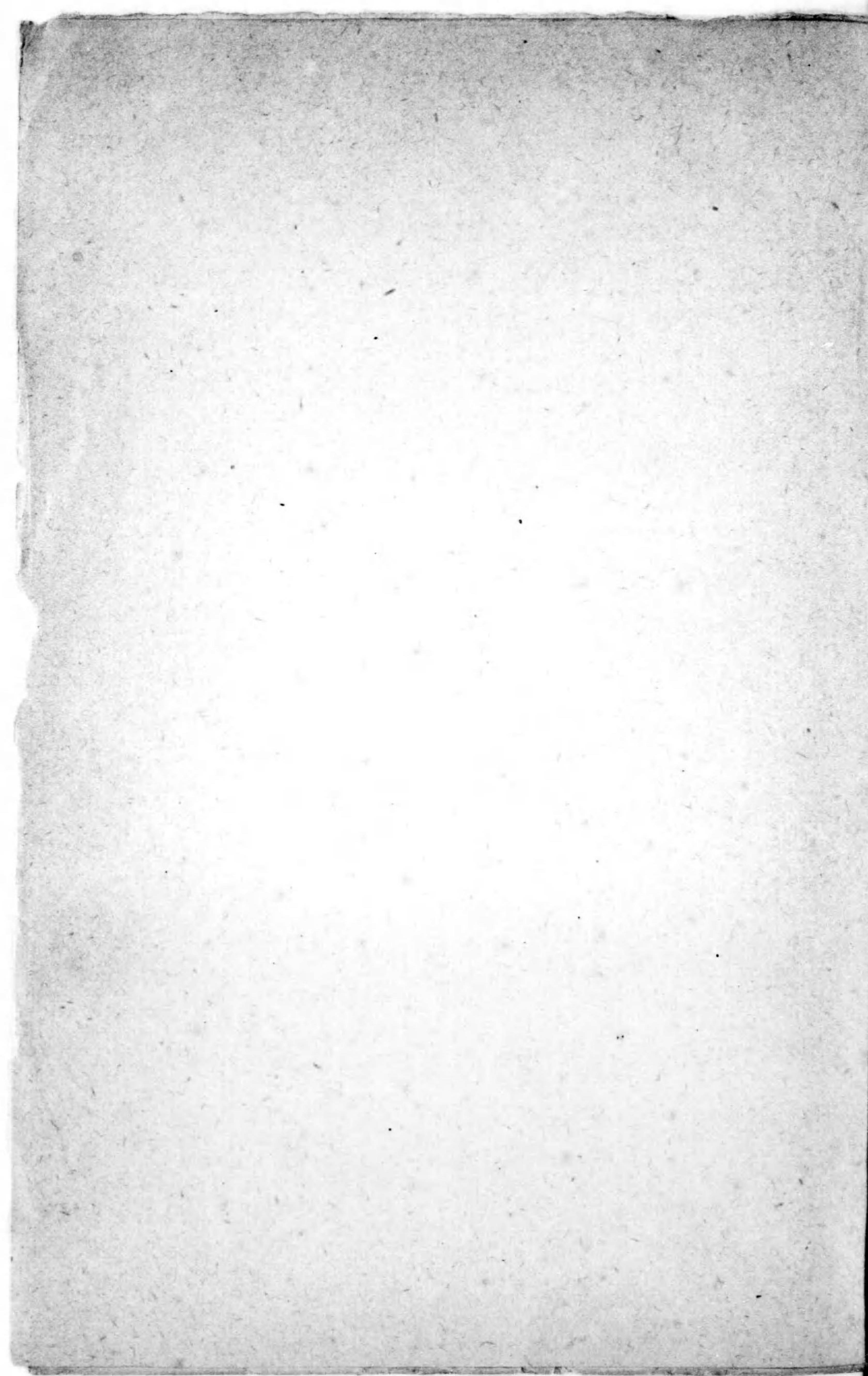
印刷所  
東京市神田區東松下町五十二番地  
豐 世 社

發賣所

東京市小石川區白山前町  
(振替東京四七七八番)

大明堂書店







15  
14



終

